

日本とスペインをつなぐ無料スペイン情報誌 [アクエドクト]

acueducto

La revista española en Japón

¥0

GRATIS/第4号

17-febrero - 2011

www.acueducto.jp

巻頭特集

スペインの食・ 過去から未来への大胆な飛翔



スペイン政府観光局
www.spain.info

EDUESPAÑA



Cámara
Madrid



FEDERACIÓN DEL SECTOR
DE TURISMO Y PLAYAS
DE ALICANTE



MARBELLA
EXCLUSIVE



Centro Cultural Español
スペイン文化センター



ご挨拶

スペイン情報誌「acueducto」第4号をお届け致します。

アリカンテ大学
大学付属外国人向け
スペイン語コース
CURSOS DE ESPAÑOL



毎週月曜日入校可
1週間から長期まで
初心者から上級者まで
大学キャンパスでの授業
豊富なアクティビティー
DELE試験会場
お問い合わせ

japan@csidiomas.ua.es (日本語OK)
Tel: +34 96 590 9377
Campus de la Universidad de Alicante,
03690, San Vicente del Raspeig, Spain

www.csidiomas.ua.es



坂東省次

ばんどうしょうじ / Shoji Bando

京都外国語大学スペイン語学科長・教授。京都セルバンテス懇話会代表。専攻はスペイン語学、日西交流史。

近著に『スペインを訪れた日本人—エリートたちの異文化体験』(行路社)がある。

昨年の10月、経済の低迷が続くスペインに、スウェーデンから一条の光が差しこみました。ペルー出身でスペイン在住の作家マリオ・バルガス・リョサにノーベル文学賞が授与されたのです。今、彼はアメリカ合衆国のプリントン大学に滞在中ですが、受章に際して「賞はスペイン語に対する表彰である」と述べられたそうです。スペイン語文学はイベリア半島に誕生し、1492年以降はスペイン語が海外に運ばれる中、ラテンアメリカ各国にも豊かなスペイン語文学が誕生してゆきます。

しかしながら、少なくともイベリア半島に誕生する文学を考えると、『ドン・キホーテ』などすぐれた文学作品を世界に送ってきたスペイン語文学だけがスペイン文学でないことを知っておきたいものです。スペインの文学にはスペイン語文学だけでなく、ガリシア語文学、カタルーニャ語文学、バスク語文学もまた含まれているのです。

フランコ独裁時代(1939-75年)は文化統一政策として、スペイン語だけが公的な使用を許可されてきました。そんな中、1961年には地方語による出版が許可され、1978年の新しい憲法によって地方語も公的に使用が許可されるようになりました。その結果、地方語が再生し、当然、地方語による文学活動も活発になってきました。

この度『スペイン文化事典』が丸善から上梓されて注目されていますが、この中でもガリシア語、バスク語、そしてカタルーニャ語の再生と活発な文学活動のことが解説されています。それらを読んでいますと、スペイン語以外の言語による文学活動が認められて、ノーベル文学賞の受賞に輝く日も決して遠いことでは思いが脳裏をよぎります。

本誌でも、これからスペインの地方語と地方文化の紹介にも力を入れてゆく所存です。

坂東省次

Cuarto número de la revista ACUEDUCTO

En octubre del año pasado, llegó a España, cuya economía estaba en mala situación, una agradable noticia procedente de Suecia. El escritor peruano nacionalizado español Mario Vargas Llosa ganaba el Premio Nobel de Literatura. Vargas Llosa, que actualmente se halla en la Universidad de Princeton de los Estados Unidos, al recibir el galardón, comentó con satisfacción que el premio era para la lengua española. La literatura española nació en la Península Ibérica y a partir de 1492, con el paso de la divulgación del castellano por Latinoamérica y el aumento de los países hispanohablantes, aparecieron las literaturas de cada país. Conocemos obras maestras, como El Quijote, escritas en castellano, pero

no solo estas obras completan la literatura española, ya que hay que incluir también las obras en gallego, catalán o en euskera.

Durante la dictadura de Franco (1939-1975), el gobierno obligó a utilizar solo el castellano como la única lengua común, intentando uniformar la cultura en el ámbito nacional. La situación siguió sin grandes cambios hasta que en 1961 se admitió oficialmente la publicación de las obras en sus lenguas locales. Y en 1978, ya después de la muerte de Franco, por el establecimiento de una nueva Constitución, se autorizaría el uso de estos idiomas. De ahí que las lenguas locales resucitaran y sus actividades literarias llegaran a ser intensas. En la Enciclopedia de la Cultura Española de la Editorial Maruzen, que se ha publicado recientemente, se explica detalladamente este hecho. Tras leerlo, creemos que en un futuro cercano las actividades literarias en estas lenguas serán más valoradas y algún escritor podrá recibir el Premio Nobel de Literatura.

En futuras publicaciones, intentaremos esforzarnos en introducirles las lenguas y culturas locales.

Shoji Bando

Índice

Carta del Director	2
Índice	3
Especial Gastronomía	4
- Gastronomía española: Un paso dinámico desde el pasado hasta el futuro	
Libros	16
- Presentación del libro Introducción al derecho español moderno	
- Crítica literaria. Pío Baroja, El árbol de la ciencia	
Nuevas publicaciones	20
Fútbol	22
- Entrevista: Vicente del Bosque	
Español	24
- Lección de español para principiantes (4)	
* verbo TENER	
- Lección de español (IV)	
* Expresiones de impersonalidad	
Música	32
- Llevada por el viento, Castilla	
Flamenco	34
- La Seguidilla	
- Japón triunfa en La Catedral del Flamenco	
España y Yo	39
- Apuntes en un partido de fútbol, diferencias de la realidad a lo imaginado	
Historia	40
- Serie: Tres episodios sobre Guernika	
* Episodio 3: La aparición de Guernika y su repercusión	
Ensayo	42
- La noche de Madrid (4)	
Varios	44
- Club de español	
* La Universidad de la Prefectura de Aichi	
- Presentación de La Asociación Internacional de Nishinomiya	
- El japonés que amaba España: Nagakawa Reiji	

ご挨拶	
acueducto 目次	
特集・グルメ	
スペインの食・過去から未来への大胆な飛翔	
本	
「現代スペイン語入門」について	
書評 ピオ・バローハ 『知恵の木』	
新刊紹介	
サッカー	
ビセンテ・デル・ボスケ インタビュー	
スペイン語	
はじめてのスペイン語講座	
第4回 動詞のTENERについて	
スペイン語講座	
(IV) 無人称表現について	
音楽	
風に吹かれてカスティージャ	
フラメンコ	
シギリージャ	
日本、フラメンコ聖地で成功	
スペインと私	
“思い込み”スペインサッカー観戦記	
歴史	
シリーズ ゲルニカをめぐる3つのエピソード	
その3 ピカソのゲルニカ誕生とその波紋	
エッセー	
マドリードの夜(4)	
その他	
日本で活動するスペイン関連クラブのご紹介	
第4回 愛知県立大学 瀬戸市外国籍児童・生徒	
学習支援スクールボランティアグループ	
西宮市国際交流協会	
スペイン語ボランティアのご紹介	
スペインを愛した日本人一永川玲二	

スペイン情報誌 acueducto

Director:
Shoji Bando 坂東省次

Colaboradores:
Yo Kawanari 川成洋
Kuniyoshi Nakai 仲井邦佳
Daniel Arrieta ダニエル・アリエタ
Abel Álvarez アベル・アルバレス
Kaname Ikemoto 池本かなめ
Elena Contreras
エレナ・コントレラス

Maquetación y diseño:
Ayako Wakita 脇田絢子

Editor:
Alejandro Contreras
アレハンドロ・コントレラス

ADELANTE Co., Ltd
2FL. Chiyoda Bldg.
West Annex
2-5-8 Umeda Kita-ku
Osaka 530-0001

有限会社アデランテ
〒530-0011
大阪市梅田北区2-5-8
千代田ビル西別館2F
Tel/Fax 06-6346-5554
email: info@acueducto.jp

本誌の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
本誌の内容および広告に関しては、発行元の責任の限りではありません。



スペイン語学習テキスト
好評発売中!

お問合せはアデランテまで

【著者】Ignacio Vicario,
Alejandro Contreras他
【出版社】スペイン文化センター
【ISBN】9784905227007
【ページ】104ページ
【サイズ】29.5 X 20.3 cm
【対象レベル】入門 / A1レベル
【税込価格】1,890円

Colaboradores:



スペイン政府観光局
www.spain.info



Cámara
Madrid

EDUESPAÑA



スペインの食・過去から未来への大胆な飛翔

1. プロローグ

スペイン文化の特色を語るのに「光と影」というような慣用句を使うのはいささか当たり前すぎる気もするが、スペインの食文化を語ろうと思ったらやはり、スペインの二面性について語らないわけにはいかない。

まず風土に根付く二面性を語るなら、地中海に面した東部・南部と大西洋に面した北部の気候のコントラスト。ヨーロッパ随一の魚介類消費国であることを肯かせる沿岸地方の料理と、純然たる肉食文化圏の特徴をすべて備えた内陸部の食。あるいは地中海型食体系と大陸型食体系という見方をするなら、このまったく相反する二つの食体系それぞれが独立して存在していながら、同時に混在もしているという不思議な風土などなど、様々な二面性が縦横に交差しているのが、スペインの地理的な食文化といえる。

そして今、もうひとつの重要な二面性がスペインの食のアイデンティティを形作るようになった。それは「過去の食と未来の食」である。ある若い料理人が、ため息まじりにこんな言葉を語ったことがある。

「スペイン料理は、『現在』を素通りしてしまったのだ。我々は、ほんの数年前まで時代遅れの『過去』に生きてきたというのに、今はいきなり誰より最先端の『未来』をエンジョイしているのだから。」

確かに少し前までのスペイン料理は、『偉大なる地方料理の集大成』と愛情といささかの侮蔑をこめて呼ばれてきたように、極端なまでに保守的で頑固で純粋だった。ひとつの地方の料理はその土地の人々によって長い間変わることなく受け継がれ、その土地でだけ好まれてきた。そこには「ひとつ山を越えた向こうの料理」さえ入る隙がなかった。

スペインの人々が自分たちの土地の料理を深く愛してこだわってきたことが、その頑固さの一番の原因ではあるが、それに加えて、外国からの啓蒙を許さなかったフランコ時代の文化的鎖国の影響が、つい最近まで色濃く残っていたことも否定できない。

そこに、一人の天才料理人が現れた。彼は遅まきながら世界に目を向け始めていたスペイン料理界で独自の料理の世界を模索し、それを実現した。そして彼は世界のレベルに追いつくどころか、それを飛び越えてしまった。こうしてスペインは、21世紀を先取りしたまったく新しい料理の震源地として全世界の注目を浴びるようになったのである。

この二面性を生んだ張本人である天才料理人、フェラン・アドリアはこう語る。

「この20年で、僕たちは1世紀以上のことをやってのけてしまった。」

ローマ時代にも遡る、長い歴史に裏付けられた伝統料理の魅力。豊かで高品質な食材と、その品質をさらに改良できるまで進歩したテクノロジー。そこに、21世紀のもっとも新しい料理のひらめき加わって、今スペインにはどこよりも豊かで変化に富んだ食文化が展開しつつある。食のワンダーランド、スペイン。その魅力の一端を探ってみよう。





マドリード サン・ミゲル市場

2. 伝統料理の魅力

スペインには、「仔羊を焼く煙とガルバンソを煮る湯気をつないでいくと、スペインの食文化地図を描くことができる」という言葉がある。仔羊に代表されるアサードasado (肉のロースト)の世界。ガルバンソに象徴されるギソguiso (煮込み料理)の世界。この二つが、スペインの伝統料理という小宇宙を構成していると言い換えてもいい。

スペインに行って何を食べるべきかと聞かれたら、何よりもまず勧めたいのがこういう料理だろう。肉をかまどで焼く、豆を鍋で煮込むという、いずれもこれ以上単純なものはないと言えそうな素朴な料理でありながら、これほどに、他所の国で再現するのが難しい料理もないからである。その実例のいくつかを紹介してみよう。

アランダ・デ・ドゥエロのレチャソ

レチャソlechazoとは、仔羊のなかでも特に乳飲み子の羊をさす。「レチャソ・デ・カスティーリャ・イ・レオン (カスティーリャ・レオン地方の仔羊)」と聞いただけで、アサードを好む人間は心が弾む。魚好きな日本人が、「大間のマグロ」と聞いてわくわくするのと同じようなものかもしれない。

羊は、まだ草を食べない乳飲み子であること。なおかつ、母羊がおいしい牧草を食べていること。その仔羊を昔ながらの薪のかまどで、熟練のアサードル (焼き職人) が焼くこと。これがおいしいアサードの条件である。その条件がそろったカスティーリャ・イ・レオン地方のドゥエロ川流域の一帯には、アサードを名物とする町や村が点在しているが、なかでもアランダ・デ・ドゥエロは「アサードの町」として知られている。

ドゥエロ川を城壁のように周囲にめぐらしたこの古い町は、スペイン有数の高級ワイン産地リベラ・デル・ドゥエロの一角でもある。町の家々の地下には地下蔵があり、そこにはワイン樽が積まれている。それどころか、それらの地下蔵は通路でつながっていて、かつて敵の襲来に備えての避難路や備蓄庫をかねていたことを彷彿とさせる。ドゥエロ川の恵みをうけて育つのは、ワインのためのブドウだけではない。野菜も豊富で、肉が最高となれば、この町のレストランがどれも味自慢のも当然のことだろう。

この町で「薪のかまど、あります」と看板に書かれたレストランはかならず仔羊のアサードを売り物にしているから、どの店でもいい。おいしい煙につられて入っていくと、「オルノ・モルーノ (モロッコ風のかまど) と呼ばれるオレンジを半分に割ったようなかまどがあって、薪の熱気がこちらまで伝わってくる。そこに、仔羊1頭をバンと断ち割ったダイナミックな固まりが入れられ、絶妙の火加減とタイミングで焼き上げられていく。



「コシネーロは育てられるが、アサドールは生まれる」とスペインで昔から言われるとおり、アサードの職人は生まれながらの勘とでもいいたような直感と経験とで、肉と対話しながらオルノに向かう。仔羊はそのたびに違うし薪も違う。そこではマニュアルどおりの知識は通用しない。

カスティーリャ地方のアサードは、何も特別なスパイスを使わない。肉のうまみを生かして塩と水、ごくわずかな白ワインだけをかけて焼

く。だからこそ、薪の香りまでがはっきりとわかる焼き上がりになるので、ぱりっと焼けた皮の部分はとりわけ香ばしく、一番おいしい部位として好まれることになる。

日本にも随分色々なスペインの食材が輸入されるようになったけれど、この仔羊の美味しさだけは、カスティーリャの大地まででかけていかなないと味わえない。リベラ・デル・ドゥエロのワインを添えて、内陸の美味を満喫してほしい。

ボティンのコチネージョ



いかにもマドリードの下町らしい風情のクチジェーロ通りの一角。ソブリーノ・デ・ボティン、通称「ボティン」と呼ばれるレストランがある。マドリードでもっとも古い創業のレストラン、とも言われているが、実際にはレストランとして最古参というわけではない。店の歴史は1723年にポサーダ(旅籠)として始まっている。

マジョール広場からクチジェーロ門を通過して下ってくるこの通りには、種々雑多なタイプの旅人が足を止めたことだろう。そのころからこの店は、大きなかまどをしつらえ、どちらかというと料理自慢の宿だったらしい。この時代、ポサーダの料理は一般的にはおいしくて評判というわけではなく、旅の都合上やむを得ず食べる所、場合によっては少しでも多くの勘定を取り立てるためにどちらかというと怪しげな材料を使って料理する場所というイメージさえあったらしいから、ボティンは例外だったことになる。

その後、ボティンは製菓店の時代を経てレストランとなる。どの時代にも、大きなオルノ(かまど)はボティンの象徴だった。そして今、ボティンで出される一日に150から180匹という仔豚のアサード、すなわちコチネージョcochinilloも、このオルノで焼かれている。

仔豚は、生まれてから6週間前後。乳飲み子のうちに、マドリード近郊の農場から運ばれてくる。話は少しそれるが、こうして見て行くと、スペイン人は種類を問わず乳飲み子の肉を好むということがわかってくる。レストランでなくても、市場や食肉店を見ればわかる。羊も豚も牛も、とにかく若ければ若いほど好まれるし値段も高い。

実は魚に関しても同じ傾向が存在した。メルルサという、育てば数

キログラムになる魚を稚魚でフライにしたり、ウナギの稚魚をオリーブ油で煮込んだり。このメルルサの稚魚は近年では法律で禁止されるに至ったが、そうしなかったらスペイン人は稚魚を盛んに食べてメルルサを絶滅させていたことだろう。その点、一部の雄の仔豚や仔羊をアサードにするのは、生命のリサイクルから見ればまだしも罪のない方かもしれない。

仔豚は内臓を取りきれいに掃除する。皮を上を開いた形にして素焼きの土鍋の上のにせ、ほとんど何の調味料もなしに、薪のかまどへ。ボティンでは、桜の木の薪が主に使われている。

時々かまどから出して少量の水をかける。すると、その気化熱で、皮がいつそうぱりっと焼きあがる。仔羊のときと同様、コチネージョでも一番おいしいのは皮のところなのである。焼きあがった仔豚はワゴンへと運ばれ、給仕頭によって4人分に取り分けられる。それを、頭から足まできれいに食べつくす。脳みそなども美味で、残すところはない。スペインでは「豚は、歩く姿までおいしい」というけれど、その言葉を実感できる料理である。

コチネージョを待つあいだには、いかにもカスティーリャ地方らしいニンニクのスープなど、アサードにふさわしい一皿目の料理が楽しめる。終わったあとにはバルトリージョという揚げ菓子など、これもマドリードならではのポストレ(デザート)が待っている。昔風の樽の香り鮮やかなリオハのワインも、こういう料理にはふさわしい。観光客に独占させておくにはもったいない、古き良きマドリードの食卓が、ここでは毎日繰り広げられているのである。



ポタヘ・デ・ビヒリア

ガルバンソという豆は、カルタゴ人がイベリア半島にもたらしたといわれている。乾燥豆が重要な保存食品として常に大きな役割を果たしてきたスペインでは、ほとんどの地方の食卓で

この豆の料理に出会うことができるが、ガルバンソの料理が特に生き生きとした存在感を持っているのは、やはり保存食品の需要度の高い内陸部ということになる。そしてそのなかでもまず一番に紹介したいのが、ポタヘ・デ・ビヒリアである。

スペイン語のポタヘpotajeは、日本語のポタージュというイメージとはいささか異なり、豆と野菜などをたっぷりの汁で煮込んだシチューのようなものを指す。そのポタヘのなかでポタヘ・デ・ビヒリア(精進日のポタヘ)と呼ばれるのは、ガルバンソ豆に干ダラやホウレンソウなどを加えて煮込んだもので、肉を食べることを禁じられている精進の日に食べるために生まれたという、カトリック国スペインならではの一品である。この料理が別名ポタヘ・エストレメーニョ(エストレマドゥーラ地方のポタヘ)と呼ばれることからわかるように、このポタヘを食べようと思ったらエストゥレマドゥーラへとでかけていくことを勧めたい。

ポルトガルとの国境と山々に閉ざされたエストレマドゥーラは、確かに一般的な意味で豊かな地方ではないかもしれない。しかしそこには、目立たないながらも豊かな食がぎゅっとと隠されている。スペインで一番品質のいいパブリカ、ピメントン・デ・ベラ。ヘルテのさくらんぼ。カセレス郊外の村で作られるトルタ・デ・カサルというところけるチーズ。山からはイノシシを筆頭に様々なジビエの肉。樫の木の原

生林では、今世界中で人気のイベリコ豚が放牧されてハモン・イベリコになる日を待っている。グアディアナ川沿いで作られるワインも、素朴な料理にふさわしいどっしりとした味わいがある。食材に目の肥えていたかつてのローマ人たちが、この地方のハムやワインを好んでローマへと持って帰ったというもうなずける。

グアダルペは、そんなエストレマドゥーラのなかでは比較的中央部に近い。マドリードからトレドへ向かい、その先のオロペサから南へと国道を曲がると、この小さな町が高々とそびえる教会の塔を、目印として現れる。

この町はかつて、権力を誇ったモナステリオ(大修道院)の領地として栄えた。古い独特の家々が連なる美しい町並みが残る町は修道院を中心として広がり、小さな町のどこにいても教会のミサの鐘が時計代わりに聞こえてくる。細い坂道を歩いていくと、いつの間にか町を外れていて、畑のなかから修道院の塔を見上げながら戻り道をたどることになる。

この由緒ある修道院の食堂では、レストラン顔負けの料理人が腕をふるった料理が出される。なにしろ、この修道院の神父様が書いた料理の本がいつときスペインでベストセラーになっていくくらいだから、料理自慢なのは想像できる。そしてこの食堂に金曜日に行けば、必ずポタヘが出てくる。スペインでも「金曜には精進料理」などというカトリックの習慣は聞いたこともないような若者たちが増えている昨今、こういうところに来なくては「金曜日の豆料理」を目にすることもないかもしれない。

一晩じっくりと水で戻してほどよく塩気をぬいたタラの旨み。ほうれん草の甘み。それらをしっかり吸い込んだガルバンソのほっくりした食感。最後に散らしたゆで卵が、全体の味をまろやかにまとめる。素朴でありながら計算しつくされてもいる、バランスのいい一品。スープ皿にいっぱい食べても飽きない、無理のない味付け……。肉を禁じられても、これだけおいしい料理が出てくるならかわない。そんな気にさせてくれる食事とともに、山の中の修道院の夜は更けていくのである。





マラガトというあまり聞きなれない言葉は、レオン王国の一角、アストルガという町を中心とした地域に住む人々を指す名称である。この一帯独自の文化がマラガテリアと呼ばれ、そのなかにコシード・マラガトという一皿が登場することになる。したがって、この料理を食べてみたいと思ったらまずはアストルガへとでかけていかななくてはならない。

アストルガはガウディの設計した司教館があったり、食べ物でいうとマンテカダという素朴なカステラのような菓子が名物だったりする小都会だが、ここからさらにマラガテリアへの旅が始まる。目指すのはカスティージョ・デ・ロス・ポルバサレスという村である。

昔から小さな村のことを、「村の名前を言い終わるころには村を通り過ぎてしまう」となどというスペインらしい大げさな表現があるのだが、たしかにスペインの小さな村には、村の大きさに反比例するかのように長い名前が多い。これもそのひとつといっていい。

この村に入っていくと、中世へとタイムスリップしたような不思議な空間が現れる。磨り減った石畳。その両側に並ぶ家々。傍らを流れる川。何世紀もまったく変わっていないといしか言いようがない風景のなかで、その通りに並ぶ家の何軒かがレストランとして営業していて、その売り物がコシードなのである。

店に入ると、黙っていても水差しに入れたワインと大きなパンがごがテーブルにでてくる。そしていきなり巨大な皿が、豚の耳、豚の足、豚の顔、骨付き肉、脂身、チョリソ、モルシージャ、そしてレジェーノと呼ばれるオムレツのようなものなどを満載して現れる。この事態にびっくりしているとまもなく、これも大きな皿に山盛りのガルバンソ、キ

ャベツ、ジャガイモが出てくる。こうなると、どうやって食べていったらわからない。果然とするばかりである。

マラガトの人々はアリエロ（ロバ追い）とも呼ばれ、ロバを追って一日野山で過ごしていた。だからこの料理でエネルギーを蓄えてから出かけていったのだろうが、現代のわれわれはいったいどうやって、この大量の野菜と肉を食べたらいいか？ ついに降参というところで、まだまだ肉の残っている皿を片付けてもらおうと、驚くべきことにスープの皿が出てくる。「最後にスープ？」と店の人に問いかけると、こんな返事が返ってきた。

「マラガトの人たちはロバを追って長い旅にでることが多かったから、自分の食べる肉を茹でて木の入れ物にいれて出かけた。そして旅籠や食堂につくと、まず自分の持ってきた弁当の肉を冷たいままで食べ、そのあと温かいスープを宿の人に頼んで、それを飲んでからでかけたんだよ。」

もう1軒の店では、違う説明をしてくれた。

「ロバを追っていく人たちはゆっくり食事する時間がないことが多かった。だから家では、ぜひ食べてほしいものから出したのさ。まず肉。次に野菜。時間にゆとりのある人だけが最後まで残ってスープを飲んだのだろうね」

カロリーが、あるいはコレステロールがと心配しない日が一日くらいあってもいいだろう。あの巨大な肉の皿に、一度は向かい合ってみてもいいのではないかな。そのあとにスープが出てきたときの、あの驚きをあじわってみてもいいのではないだろうか。そんな気分させてくれる、ゆったりとした時間が、マラガトの村には今も流れている。

3. エル・ブジのもたらしたもの

フェラン・アドリア

「エル・ブジ El Bulli」(コスタ・ブラバ)

たとえピカソが嫌いな人でも、ピカソを無視してスペインの絵画史を語ることはできないだろう。同じように料理の世界では今、「フェラン・アドリアを無視してスペインの料理史は語れない」という時代が訪れている。

レストラン「エル・ブジ」のオーナーシェフ、フェラン。「エル・ブジ」は確かに、6年間連続イギリスの「レストランマガジン」によって世界一のレストランとしてランキングされてきた。10年にわたって「世界でもっとも予約のとれないレストラン」といわれてきた。しかし、人気のあるレストランはほかにも次々と現れているし、優れた料理人も彼一人だけというわけではない。彼の名前が、料理史の1ページに刻まれるにいったのはどうしてなのか？ 彼は何を成し遂げたのか？

おおざっぱに言うてしまうことが許されるなら、フェランはスペイン料理界の常識をことごとく覆したのである。

毎年シーズンごとに一新されるエル・ブジのメニューには、ほとんど必ず新しい調理のテクニクが登場する。一世を風靡して今ではフランス料理やイタリア料理、いや中国料理の世界でまで定番のテクニクとなったエスプーマ(泡)を初めとして、誰も思いつかなかった食材の扱い方、組み合わせ方、そして調理法などが、今までに生まれてきた。しかし重要なのは、それらのテクニクがすべて公開され



ているということである。

何かにつけて封建的で、各料理人が自分の料理を教えることにいたって消極的だった料理の世界で、フェランは「僕のテクニクは誰でも使える」と宣言し、新作の料理のレシピをことごとく発表してきた。だから、彼のテクニクを盗むために苦労する必要はない。しかし、自分の料理を創作しようと思ったら、そこから先により困難な道が待っている。フェランは、多くの若手料理人たちに大きなチャンスを与えるとともに、本当の意味での「創作料理」というのがいかに難しいものかということも、身をもって教えたのである。

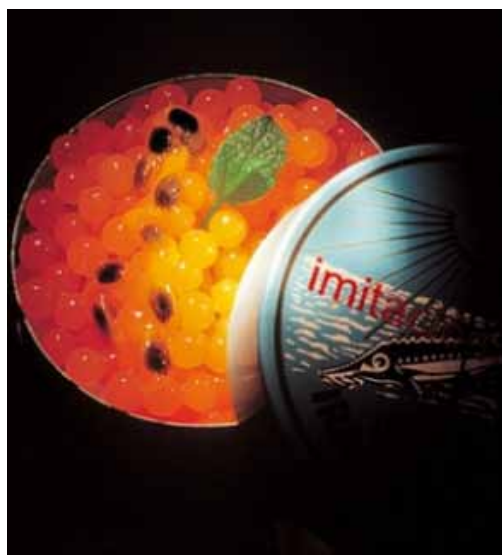
もうひとつ、彼が料理界の常識を破ったこと。それは「料理はチームで作りに上げていくもの」というエル・ブジのポリシーだろう。エル・ブジでは50人近いスタッフが働いているが、それはフェランが言うところのスポーツのチームのように一緒に働く若者たちの集団なのである。

これも封建的なレストラン業界では想像もできない発想だったが、今では若い世代のオーナーシェフをトップとする店から次第に、このポリシーも浸透しつつある。そしてその成果は、スペイン各地に、最新のテクニクと若々しいアイデアの感じられる料理を出す優れた水準のレストランが続々と生まれてきていることで証明されている。

フェランはすでに単なる料理人ではなく、彼の料理哲学を発展させ、料理と科学の融合を深めていくという使命に向けて方向転換し始めた。エル・ブジは単なるレストランとしての時代を終え、料理界の向上のための総合的な機関として生まれ変わろうとしている。現にフェランは、2012年から2年間、レストランとしてのエル・ブジの扉を閉ざして研究に専念することを発表して世間をあっといわせたばかりである。

そして今、様々な形でフェランの影響を受けた料理人たちが、現代のスペインのレストラン業界の先端を担っている。フェランの世界をどこまで受け入れるのか？ どんな形で伝統料理との折り合いをつけていくのか？ そして自分のアイデンティティをどこに求めるのか……？

それぞれが、異なったスタンスと異なった個性で、これからのスペイン料理の歩んでいく方向を示唆しているすばらしい料理人のなかから、数人にスポットライトを当ててみたい。



マノロ・デ・ラ・オサ

「ラス・レハス Las Rejas」(ペドロニエラス)



ラ・マンチャの小さな村。街道沿いの昔風の構えのレストラン。そしてサンチョ・パンサのようなどっしりとしたシェフが挨拶に出てきたら、ここで最新のテクニックを駆使したクリエイティブな料理が出てくると想像する人は少ないかもしれない。しかし彼は、れっきとした「ポスト・エル・ブジ」のシェフの一人、それも当代有数の優れた料理人の一人であり、「ラス・レハス」は、決して便利とはいえない場所にありながら、スペイン中のグルメ垂涎の名店として知られている。

マドリードから南へ100キロ。ドン・キホーテの時代そのままの田園風景のなかに、ペドロニエラスという小さな村が現れる。もともとはニンニクの産地として知られるこの村に生まれたマノロは、父親の代からのレストランを受け継ぎ、持ち前の感性で、フェランが切り開いた新しい料理のテクニックのなかに、自分の進むべき道を見出した。

ラ・マンチャの大地に根付いた食材。昔ながらの素朴な料理。そこに、シャープで切れ味のいい発想で新しい要素が加わるとき、マノロでなくては出来ない独自の料理の世界が展開する。

料理の名前だけを見ると、そのかなりのスペースを、ごく昔風の料理の名前が占めていることに気づく。ソパ・デ・アホ(ニンニクのスープ)。ガリアーノス(ラ・マンチャのガスパッチョス)。ドウエロス・イ・ケブラントス(痛みと悲哀)にいたっては、ドン・キホーテの時代に遡ったかのような最近聞くことのないほどクラシックな料理名である。

しかし出てくる料理はどれも美しいフォルムと斬新な構成の皿で、一見すると料理名とは結びつかない。口にして、味わって初めて、その名前に頷くことができる。そしてその美味に改めて感激する。マノロの細やかな感性と豊かな創造力によって、一皿のなかで過去と未来の融合が完璧に表現されているのである。

かつてエル・ブジが評判になり始めたときスペインのグルメガイドブックは「未舗装の道を20キロ行くだけの価値がある」と表現したが、私ならこのマノロの店を「マドリードから100キロ車を飛ばす価値がある」と言いたい。

見かけによらずロマンティストのマノロは、自分の料理の小宇宙を、ひとつの物語として紡いでいく。彼の料理を食べるといつも、この先どんな風に物語が展開していくのかと気になる。だからまた、国道を100キロ飛ばして訪れることになる…。

最近、同じラ・マンチャ地方のクエンカの町にも、マノロのレストランが出来た。古い町に新しい料理、という組み合わせは同じだが、物語の語り口が少し違う。「アルス・ナチュラ(自然な芸術)」と名づけられたこの店では、より自由に宇宙をはばたくマノロが見える。現代のドン・キホーテがどんな夢を追いかけていくのか、これからも彼の料理からは目が離せない。



sopa de ajo fría



galianos



duelos y quebrantos





バスク地方ギプスコア県を中心、サン・セバスチャン。かつて「スペインで一番たくさんミシュランの星が集まっている」といわれたこの町に、バスク料理界の重鎮ファン・マリ・アルサークのレストランがある。

ファン・マリと私の交流は20年以上になるので、初めてアルサークを訪れたころ次女のエレナはただのかわいいお嬢さんだったが、今では、才能と環境が一致して開花する幸運というものが存在することを実感させてくれる、すばらしい料理人に成長した。そこには、父ファン・マリの影響とフェラン・アドリアの影響が見事にからみ合っている。そのどちらがいなくても、今日のエレナはいなかっただろう。

そもそもバスク地方は、スペインで一番しっかりした料理体系が存在していた。そこへ1980年代に「新バスク料理」という新しい動きが加わって、スペインで唯一、国際レベルで通用する洗練された料理を出すレストランが軒を連ねるようになったのがサン・セバスチャンの町であり、その動きの一番の中心がファン・マリだった。

「新バスク料理」の土台となったのは、昔ながらのバスク料理の発掘、昔ながらの素材の再認識、そして最後に新しい食材への挑戦だった。つまり、ここでは新しさは「素材」という形で導入されてきた。しかしフェラン以降、新しさの定義は変わった。ひとつの素材に新しい調理法をみつけること、新しいテクスチュアを生み出すこと。これが現代の料理人たちに出されている新しい宿題なのである。

その点、バスク料理にフェラン的新しさを見事に実現している若手の一人がエレナだといっていだろう。ひとつの素材を使ってテクス

チュアで遊ぶ。色で遊ぶ。しかしその素材は、昔ながらのチピロン(小イカ)だったり、珍しくないラディッシュだったりする。フェランから学んだ科学的な発想に、女性らしい細やかな感性と豊かな色彩感覚を加えて、エレナの作り出す皿はどれも、楽しくて好奇心をそそる出来上がりになっている。

ファン・マリはそんな娘の才能を大いに認めながらも、彼は彼なりに新しい料理に挑戦している。

「料理人は、いくつになっても料理人。3色の信号をみたら3色のボンボンに見えるのが料理人だ。常に頭のなかには新しい料理のアイデアがある。エレナの料理は楽しい。フェランは天才だ。だが私は私の料理をつくる。それでいいじゃないか?」

だから「アルサーク」のメニューは、素直においしさをたっぷりと味わいながら、同時に新鮮な驚きも楽しむことができる。付け加えるなら、このランクの高級レストランとしては珍しいほどの暖かで家庭的なサービスも、何代も続いてきたこの老舗ならではの魅力のひとつになっている。

スペインにはもともと「コシネーラ(女性料理人)」の偉大な伝統がある。この店も、先代までの料理人はファン・マリの祖母であり母だった。エレナはその流れを見事に受け継ぎながら、現代女性として、仕事も、2児の母としての生活もフルに楽しんでいる。どこにも支店を出さずに、サン・セバスチャンだけで本当に自分たちらしいレストランを守ろうと決意した父と娘に、心からの拍手を贈りたい。



ジョアン・ロカ 「セジェール・カン・ロカ Celler Can Roca」(ジローナ)

フェラン・アドリアの愛弟子の一人、ジョアン・ロカとその兄弟の店は、カタルニアのなかでも豊かな町ジローナの町外れに位置している。スペインを代表するシェフの一人ジョアンを中心として、ソムリエのジョセップ、パティシエのジョルディの3兄弟は、両親から受け継いだレストラン業を見事にレベルアップし、いまやこの店は「いつ行ってもがっかりすることのない、最高の品質と味のレストラン」とスペイン内外のグルメたちから高い評価を受けるようになった。

もともと始まりは、3人兄弟の母が料理人として采配を振るう「カン・ロカ(ロカの家)」という素朴な町の食堂だった。ジローナの素朴で温かい味の家庭料理を、気取らない空間でたっぷりと食べる。そんな食堂を切り盛りする母に育てられたジョアンは優れた料理人に育った

が、彼に大きな転機を与えたのはフェランだった。ジョアンはフェランのすべてに心酔し、モンジョイ入り江のエル・ブジに足しげく通った。なかでも、母の食堂の隣で「セジェール・カン・ロカ」として独自の料理の世界を築いていこうと努力していたジョアンを大きく成長させてくれたのは、「チームで料理を作る」というフェランのシステムだった。

自分ひとりで考えることはない。もともとこの店は家族のもの、兄弟のもの。厨房のスタッフも、そのファミリーの一部だと考えれば、新たな可能性が生まれてくる。自分より若い世代の意見。ほかの店で修業してきた料理人のアイデア。すべてを取り入れて、この店の個性を作っていけばいい…。料理そのものに才能があるだけでなく、皆に慕われる兄のような性格のジョアンは、チームの信頼を集め、そこにはエル・



ブジとはまた違う、良い雰囲気共同体が誕生したのである。

厨房のチームだけではない。この店では、レストラン全体のチームプレイが暖かく客を迎えてくれる。レストランのホールに入ると笑顔で迎えてくれるのはジョアンの奥さんのエンカルナであり、食堂に座るとワインの相談にのってくれるのは弟のジョセップ。厨房に挨拶にいけば、ジョアンとともに下の弟のジョルディが、デザート部門から手を振ってくれる。

そして出される料理も、華やかで斬新でありながら、ジョアンの温和人柄を反映してどこかやさしくおだやかな味で、人を跳ね返すことなく受け入れてくれる。ジョセップは、出された料理にさらに生き生きした個性を加えるような意表をつくワインの選択で客を魅了する。そ

れに加えて、いまやスペインのデザート界一の人気者となったジョルディの尽きることのないアイデアは、デザートに止まらず、香水の香りからシャンパンの泡、そして葉巻の煙まであらゆるものを皿の上で表現するに至っている。時には暴走に近い弟の飛躍ぶりに苦笑いしながらも、ジョアン自身のインスピレーションも大いに刺激されて、彼の料理にまた新しい幅が広がっていく……。

ジョアンは家族とチームに支えられて、彼自身ののびやかな個性を生かした新作料理とそれにふさわしい空間が一体となったレストランという、多くの料理人の夢を実現したのである。今が円熟期のジョアンの料理を味わう機会があったら、これはまさに僥倖というべきだろう。

セルジ・アロラ

「セルジ・アロラ・ガストロ Sergi Arola Gastro」

(マドリード)

スペイン料理界が「未知数」を好むようになったとしたらそれはフェランの功績のひとつだが、そんななかでも特に、常に未知数であることを目指しているシェフがいるとしたら、それはセルジだろう。

「ステイタスとしての高級レストランはあっても、味で勝負できるシェフは不在」と長年のあいだ批判されてきた首都マドリードのレストラン業界を、見事逆転させたセルジ。彼もフェランに育てられた「エル・ブジ学校」の卒業生だが、料理のスタンスは彼独自のもので、カタルニアの家庭料理を土台としながら大胆で力強いセルジの料理の世界は、常に多くのファンを魅了してきた。

何より端的に彼の実力を示しているのは、昨今フェランを筆頭として最先端のシェフがひしめくカタルーニャ地方から、最初にマドリードに進出して成功したのがこのセルジだということだろう。

セルジがマドリードで最初に開いたのは、むしろこじんまりしたレストランだったが、そこで瞬間にマドリードのセレブたちの関心を独り占めにして、次にはクラシックなホテル付属のレストランをミニマリスムのインテリアがシックな高級店に変身させてオープン。高級レストランといえば昔風の豪華さを売り物にすると信じられてきたマドリードのレストラン業界の古い体質を、見事に覆して見せた。エル・ブジ仕込みのサービス体制のよさは、セルジの奥さんのサラによって完璧に再現され、これでいよいよセルジも落ち着くのかと思われたが、それは誤算だった。

テレビのトーク番組に出て、ひっぱりだこになる。積極的に環境問題や第3世界への援助にも関心を示す。そして料理人としても名声に安住せずに、常に新しい可能性を探していく。

そんな彼が次に開いたのが、「セルジ・アロラ・ガストロ」。セルジ個人の好みでレストランを作ったらこうなった、と言いたいような、彼の主張が隅々まで感じられる店である。

フェランの弟子として身近に彼のシステムを学んできた彼は、だからこそ逆に早くから、「フェランの後ろを追っていたのでは何もできない」ということにはっきりと気づいていた。フェランの生んだ技巧に頼り過ぎない。フェランの巻き起こした流行からむしろ遠ざかる。そんなセルジの現在の料理は、出来上がった皿を見ると一見クラシックな料理に仕上がっている。銜いのない豆のスープ。素直にご馳走らしい肉料理。フランス風の懐かしいデザートとの再現。それらの料理が、実際に口にすると一ひねりも二ひねりもした立体感のある複雑な味に仕上がっていて、客をうならせる。

それというのも彼はなかなかの理論派で、自分のイメージした料理を的確に分析し、系統立ててひとつの皿として完成していくという困難な作業を、むしろ楽しんでやっつけているからだろう。だから料理にめりはりがあり、単なる思いつきに終わらない。その力量には常に感心させられる。

傲慢なほどに自信がある。それでいてデリケートな感性と揺れ動く自分を知るだけの知性がある。こういう手に負えない腕白坊主のような才能あるシェフが出現するから、スペインという国は面白い。必ずしも新しい路線を追うことなく、したたかに自分なりの「王道」を模索していく彼を見て、スペイン料理の未来に一段と期待を寄せたくなるのは私だけではないだろう。



4. エピローグ---日本のスペイン料理

外国料理を取り入れることの好きな日本で、スペイン料理の普及はむしろ遅かったといってもいいだろう。しかし近年、スペイン料理に関する人々の知識は、少しずつとはいえ確実に増えてきている。

知識だけではない。オリーブ油にはじまりワインへ、そして生ハムへと食材そのものも、ほんの10年前までは想像できなかったほど豊富に輸入されるようになり、今では「スペインと同じ味」を再現しようと思ったら可能だ、と言い切れるところまで状況は変わってきた。そして知識や食材の普及をはるかに追い越すスピードで、スペイン料理の看板を掲げる店も、急速に増えつつある。

そこには、さまざまな葛藤があり模索があると思う。まったく違う嗜好をもつ人々を対象に、どこまで本物のスペインの味を提供できるのか？どこまで本場の食材にこだわるのか？むしろはっきりと「日本版スペイン料理」であることをメリットとしてもいいのではないかと……。

それぞれの主張とビジネスとしての妥協などが一体となって、本当にさまざまな「スペイン料理」が町に溢れ始めている。スペインと銘打っていても実際には、味も食材もスペインのものとはかけ離れたものを出している店から、スペインの本店を上回るといわれるほどの評価を勝ち得て注目される高級レストランまで、それらすべてが、「これからの日本におけるスペイン料理」という課題への問いかけとなっている。

日本でのスペイン料理店は、そもそものはじめから日本人客がターゲットだった。欧米での日本料理店のように「現地に滞在する日本人のための店」として始まったわけではない。言いかえれば、スペイン人がターゲットではないから「何を出しても、間違っていないと誰にもわからない」という状況が存在した。このことが、日本におけるスペイン料理の発展をずいぶん遅らせたのではないと思う。

しかし今、スペインを旅したことがある人も増えてきた。おいしいスペイン料理とはどんなものか、知る人も増えてきた。私自身、長年スペイン料理を教えてきて、この20年間で習う人たちの意識がどれほど変わってきたか、そしていかに基礎知識が豊富になってきたかということには目を見張る思いがする。もう、「パエリアだけがスペイン料理」という時代は終わったと言い切ってもいいだろう。

だからこそ、きちんとしたスペイン料理をだす店、スペイン料理というジャンルのなかで自分なりの工夫や努力をしている店は、自然に評価されて生き残り、いい加減なものは淘汰されるという時代が来ているのではないだろうか。スペインという豊かな食文化を持つ国と係わることで、日本の食にもあらたな活力を与えようというくらいの意気込みで、若い料理人たちがスペイン料理というジャンルに挑戦してくれることを、心から期待したい。

(文・写真提供 渡辺万里)



著者が主催する料理アカデミーの授業風景(写真上・下)

(渡辺万里料理アカデミー <http://academia-spain.com>)



スペインの竈から

美味しく読むスペイン料理の歴史
渡辺万里著

【税込定価】1,890円(本体1,800円)

【出版社】現代書館

【ISBN】978-4-7684-5645-3

【仕様】四六判・並製・208ページ

渡辺万里

わたなべまり / Mari Watanabe

学習院大学法学部政治学科卒。

1975年よりスペインで食文化史の研究に取り組むと同時に、スペイン料理界最前線での取材に従事する。

1989年、東京・目白に『スペイン料理文化アカデミー』を開設。さらに各地での講演、執筆などを通してスペイン文化の紹介に携わっている。早稲田大学文化構想学部非常勤講師。

著書に「エル・ブジ究極のレシピ集」(日本文芸社)、「修道院のうずら料理」(現代書館)、「スペインの竈から」(現代書館)など。

スペイン料理文化アカデミー <http://academia-spain.com>

〒171-0031 東京都豊島区目白4-23-2 TEL: 03-3953-8414

スペイン料理クラス、スペインワインを楽しむ会、フラメンコ・ギタークラスなど開催



Presentación del libro

“Introducción al Derecho Español Moderno”

En pasados números de la revista “Acueducto” se ha hecho referencia al libro “Introducción al Derecho Español Moderno”, publicado en japonés por la Editorial Sagano Shoin. Esta obra ha sido coordinada por la parte española por el abogado y jurista Francisco Barberán y por la japonesa, por el Profesor Okabe, participando un destacado grupo de especialistas españoles y japoneses, así como la Asociación de Estudios de Derecho Hispánico de Japón.

De esta publicación habría que destacar antes de nada que es el primer libro en lengua japonesa sobre Derecho español, es decir, constituye una primicia editorial. Es una obra científica que trata cuestiones jurídicas, pero es preciso señalar que al mismo tiempo es asequible al lector no especializado. Y aquí radica la importancia en última instancia de esta obra, pues debe servir para un mayor acercamiento y conocimiento mutuo entre España y Japón.

Puede que esta afirmación sorprenda tratándose de una publicación de su carácter, pero sucede que sin conocer el sistema jurídico de un país, no se puede conocer su esencia. Ésta es la conclusión a la que llega el Profesor Philipp Longworth en su interesante libro “El nacimiento de Europa Oriental” (Editorial Mac Millan Press, 1997). En el prólogo a su segunda edición señala que se trata de una edición revisada en la que ha introducido importantes novedades al percatarse de la importancia del Derecho y de los sistemas jurídicos en la conformación de la evolución histórica, política, económica, social y cultural de los países. Por ello incluye un estudio sobre las diferencias en la evolución histórica de Europa Central y Oriental, y sus instituciones públicas y privadas, debido a la influencia respectivamente del Derecho romano y de la tradición jurídica bizantina en estas dos zonas de Europa.

En función de la tesis del Profesor Longworth, la obra “Introducción al Derecho Español Moderno” no debe ser vista como un libro para especialistas, es decir para juristas, sino más ampliamente, como una obra que permitirá a los lectores japoneses conocer mejor España y su evolución histórica, política, económica, social y cultural, y la de sus instituciones públicas y privadas.

A lo anterior es preciso añadir, y subrayar muy especialmente, la importancia del Derecho y de los juristas en la historia de España. Haciendo una brevísima referencia a los orígenes históricos del Derecho español, se puede afirmar que primero el Derecho romano, con una impronta decisiva, y posteriormente el Derecho germánico, anclaron a España en Occidente, compartiendo así, sobretudo con la Europa continental, una misma tradición jurídica. También fueron decisivas en la conformación nacional de España las compilaciones



現代スペイン法入門

日本スペイン法研究会・サラゴサ大学法学部・

Nichiza日本法研究班 共編

【税込定価】5,040円(本体4,800円)

【出版社】嵯峨野書院

【ISBN】978-4-7823-0507-2

【仕様】A 5・上製・438頁

legislativas medievales como las Siete Partidas de Alfonso X El Sabio (1265), el Ordenamiento de Alcalá (1348) y las familias de Fueros españoles, estudiados por tempranos especialistas del siglo XIX como Eduardo de Hinojosa. Posteriormente, las recopilaciones renacentistas como las Ordenanzas Reales de Castilla (1484) de Alonso Díez de Montalvo y la Nueva Recopilación (1567) del licenciado Atienza vuelven a destacar la importancia histórica del Derecho en la organización política y social de España. Más llamativas aún son las muchas recopilaciones americanas como el Cedulaire de Vasco de Puga (1563), el Código Peruano de Gaspar Escalona (1635), la Novísima Recopilación de León Pinelo (1636) o la Recopilación de Indias (1680), realizada bajo Carlos II. Este corpus conforma el conocido como Derecho indiano, estudiado por los Profesores Altamira, Manzano, Malagón y García Gallo, entre otros. En cuanto a los movimientos codificadores y el constitucionalismo del siglo XIX, éstos vinculan de nuevo a España con las corrientes jurídicas coetáneas de la Europa continental. Finalmente, no se debe olvidar la aportación fundamental al Derecho Internacional Público actual de la Escuela española de Derecho del siglo XVI mediante la concepción de las bases del mismo.

En suma, se puede decir que el español tiene el Derecho en la sangre. Si Aristóteles definió al hombre como un *zoon politikón*, un animal político, si se permite la licencia, habría que definir al español como un *animal jurídico*.

Si la afirmación anterior parece exagerada, quisiera ilustrarla con un breve *excursus* por la historia y la impronta del Derecho español en la América hispana. Es un hecho que desde sus inicios, las leyes y los pleitos formaron parte del Descubrimiento, la Conquista y la Colonización de América por los españoles. Así el *Descubrimiento* de América comienza con un acto jurídico: las Capitulaciones de Santa Fé entre Cristóbal Colón y los Reyes Católicos, aún antes de ser descubiertas las Indias; y luego le siguen los pleitos entre el Almirante de la Mar Océana y la Corona de Castilla. Por su parte, la *Conquista* de México se inicia con un acto jurídico, la fundación de la Villa Rica de la Vera Cruz por Hernán Cortés, acto que hunde sus raíces en la fuerte tradición municipalista española y en los Fueros históricos medievales (no olvidemos que Cortés había estudiado en la prestigiosísima Universidad de Salamanca). Otrosí, la *Colonización* del Perú, y las tres guerras civiles entre sus Conquistadores, tienen sus inicios y fin en actos jurídicos: se inician por las desavenencias en torno al acto jurídico del reparto de encomiendas, y concluyen con la imposición, por la fuerza de las armas, de las Leyes Nuevas de 1542 por un antiguo Rector de la Universidad de Salamanca, Pedro de La Gasca. Finalmente, cabe recordar que las Siete Partidas de Alfonso X El Sabio suponen uno de los legados más importantes a la historia del Derecho, al constituir un cuerpo jurídico vigente en Iberoamérica hasta el siglo XIX.

Por otra parte, en relación con la América española, es preciso recordar la muy temprana fundación de universidades y la relevancia de los estudios jurídicos. Si bien sus orígenes como *Studium Generale* se remontan a 1518, en 1538 se funda la Universidad de Santo Tomás, en la Isla Española, hoy la República de Santo Domingo. En 1551 se establecen dos Universidades más, la de México y la de Lima. Ésta última es la aún hoy prestigiosa Universidad de San Marcos de Lima, donde estudió el último Premio Nobel de Literatura, el escritor hispano-peruano Mario Vargas Llosa.

A lo anterior es preciso añadir que aún en nuestros días persiste una influencia palpable del Derecho español en Iberoamérica y en los estudios universitarios contemporáneos de Derecho en estos países. Es decir, existe un “corpus jurídico” español en la Iberoamérica de hoy. Ello se explica por la tradición jurídica proveniente de un pasado histórico común, a lo que se suma el hecho de que también

hoy en día en las Universidades iberoamericanas a menudo se emplean libros de texto universitarios españoles sobre Derecho civil, penal, administrativo, procesal y otros campos jurídicos. Éste es precisamente otro motivo más para destacar la importancia de la reciente publicación en japonés del libro “Introducción al Derecho Español Moderno”, pues supone no sólo una ventana a la comprensión de España y su evolución histórica, política, económica, social y cultural, sino también a la de los países iberoamericanos.

No obstante, también conviene volver a subrayar el carácter técnico y científico de la publicación “Introducción al Derecho Español Moderno”. El Derecho es una ciencia, y de aquí la necesidad de contar con auténticos técnicos, los juristas, a fin de que las leyes cuenten con una adecuada base técnica. Ésta no es cuestión baladí pues ello redundaría en la seguridad jurídica, que es la piedra angular no sólo de toda sociedad, sino también de toda economía, de la actividad empresarial y de la inversión extranjera, como la japonesa en España. Las normas jurídicas tienen que cumplir el objetivo fundamental de servir al bien público regulando técnicamente la realidad social o económica, evitando ser condicionadas por objetivos a corto plazo. En palabras de Cicerón, somos servidores de las leyes para poder ser libres, y en esta faceta de la defensa de la libertad, los juristas tienen un destacado papel que desempeñar.

En conclusión, se debe valorar altamente la publicación en japonés del libro “Introducción al Derecho Español Moderno” por varios motivos. Primero, porque es una primicia editorial en Japón y una notable obra científica producida por especialistas. En segundo lugar, y ello es cuestión de aún mayor importancia, porque al mismo tiempo es una obra asequible que permitirá a los lectores japoneses no especializados conocer mejor España y su evolución histórica, política, económica, social y cultural, y la de sus instituciones públicas y privadas. Con su publicación se colma una laguna y se refuerza el creciente acercamiento y conocimiento mutuo entre España y Japón.

Carlos Abella y de Arístegui
Consejero Cultural
Embajada de España - Tokio



Carlos Abella y de Arístegui カルロス・アベリャ・イ・デアリステギ

Es Licenciado en Derecho e ingresó en la Carrera Diplomática en 1994. En el exterior, ha desempeñado puestos en las Embajadas de España en las Repúblicas del Zaire, Congo, Croacia y Rusia. En el Ministerio de Asuntos Exteriores ha sido Asesor de los Gabinetes de los Ministros de Asuntos Exteriores, de Interior, y del Secretario de Estado para la Cooperación Internacional y para Iberoamérica. En la actualidad, es Consejero Cultural en la Embajada de España en Tokio.

法学士取得後、1994年にスペイン外務省入省
その後、ザイール、コンゴ、クロアチア、ロシアのスペイン大使館に勤務。
スペイン外務省では外務大臣、内務大臣や国際協力・イberoアメリカ長官の官房アドバイザーを歴任。
現在駐日スペイン大使館文化担当参事官。

「現代スペイン法入門」について 日本語訳

Acueductoのバックナンバーでもご紹介しておりますが、「現代スペイン法入門」(嵯峨野書院出版)の出版にあたって、スペイン側からは弁護士で法律家のフランシスコ・バルベラン氏、日本側からは岡部史信先生が参加し、その他にもスペイン及び日本の専門家の方々、そして日本スペイン法研究会などが携わっていらっしゃいます。

まずこの本について皆様に申し上げたいのは、日本語による初のスペイン法の本であるということです。法律に関連した内容の専門書となっておりますが、専門家でない読者の方々に分かりやすく解説されております。まさにこれが本作品の特徴であり、スペインと日本の相互理解に役立つものになるのではないかと思います。

一国の本質を理解するにはその国の法制度を熟知していないと難しいものです。本作の内容に照らし合わせると私のこの発言に皆様は驚くかもしれません。しかし、これはフィリップ・ロングワース教授著の興味深い本「東欧の誕生」(マックミランプレス出版、1997年)の中でも記されています。同本の第二版序文でも校正をした旨説明し、法と制度が各国の歴史、政治、経済、社会、文化の変遷を形付けたと明言されています。そのため中欧と東欧の歴史的変遷や、公的機関、民間企業の違いを分析しており、各々ローマ法とビザンチン伝統法が与えた影響が紹介されています。

ロングワース教授の意見を引用して申し上げますと、「現代スペイン法入門」は法律家のための専門書ではなく、幅広く日本の読者がスペインの歴史、政治、経済、社会、文化、そして公的機関および民間企業の変遷への理解を深めて頂ける一冊なのです。

特にスペインの歴史において、法と法律家の存在は大きな意味を持っています。スペイン法の起源について簡単に述べますと、まず初めにローマ法、そしてその後のゲルマン法がスペインを西欧に決定的に繋げることになりました。これによりヨーロッパ大陸と同じ法制度を共有することになります。更に、スペインの国家成立には中法規集の存在が明らかであり、アルフォンソ10世の七部法典(1265年)やアルカラ法令集(1348年)、そしてエデュアルド・デ・イノホサなどの19世紀初期の専門家が研究した裁判法典などがあげられます。その後、アロンソ・ディエス・デ・モンタルボによるカスティーリャ王国法令(1484年)やアティエンサ学士の新法規集(1567年)で再びスペインの政治・社会制度における法の歴史的重要性を強調しています。またアメリカ法規集については更に、バスコ・デ・プガの勅許集(1563年)、ガスパール・エスカローナのペルー法規(1635年)、レオン・ピネロの最新法規集(1636年)、カルロス二世の指示で作られた中南米法規集(1680年)などがあります。これらの法典はインド法として知られており、アルタミラ、マンサノ、マラゴン、ガルシア・ガジョなどの教授陣などにより研究されています。19世紀の法典編纂および憲法については、スペインはヨーロッパ大陸の流れに沿って動いておりました。最後に、現在の国際公法が確立されたのは16世紀のスペイン法学派の基礎があつてこそということは、忘れてはなりません。

結論として、スペイン人の血には法が宿っていると言えるでしょう。哲学者のアリストテレスが人間を *zoon politikon* 『政治の動物』として位置づけたならば、私の意見を申し上げますと、スペイン人は『法の動物』であると言えるのではないのでしょうか。

前述の発言が大げさと思われるかもしれませんが、ラテンアメリカにおいてのスペイン法の影響とその歴史について簡単に説明したいと思います。スペイン人がアメリカ新大陸を発見し、その土地を征服して植民地化するまで、当初から法や訴訟制度はその一部でありました。アメリカ新大

陸発見も法律行為から始まっています。つまりクリストバル・コロン(コロンブス)がカトリック両王と結んだサンタフェの協約からであり、中南米発見前のことでありました。その後、マール・オセアナ提督とカスティーリャ王国間の訴訟が続きます。さらにメキシコの征服も法律行為で始まり、エルナン・コルテスのビジャ・リカ・デ・ラ・ベラ・クルスが設立され、スペインの伝統的な地方制度や中世特権を顕著に引き継いでおります(コルテスは有名なサラマンカ大学で学んでいます)。また、ペルーの植民地化や征服者間の3つの内戦も、法律行為で始まり法律行為で終わっています。それはエンコミエンダの法的措置の違いから始まり、1542年にサラマンカ大学の旧学長であったペドロ・デ・ラ・ガスカによる新法の強制執行で終わったのです。最後に、アルフォンソ10世の七部法典は法の歴史において大変重要な遺産であり、19世紀末でイベロアメリカの法制度として執行されておりました。

中南米においては、早くより大学が設立され、法学問の発展に貢献していました。Studium Generaleなどの起源は1518年まで溯りますが、1538年にはイスラ・エスパニョーラ(今日のサント・ドミンゴ共和国)でサント・トマス大学が設立されます。更に1551年にはメキシコとリマで二つの大学が新たに開校されます。リマの有名なサン・マルコス大学がその一つであり、今年のノーベル文学賞を受賞しましたスペイン・ペルー国籍のマリオ・バルガス・リョサ氏の母校でもあります。

現在でもイベロアメリカにおいて、そしてそれらの国々の近代法学問において、スペイン法の影響が明白に残っております。すなわち、今日のイベロアメリカではスペインの“corpus juridico”(法典)が存在するのであります。これは共通する歴史から生まれた法制度であり、イベロアメリカの大学では現在でもスペインの大学教材を用いて、民法、行政法、訴訟法などの授業を教えているのです。これもまた「現代スペイン法入門」の出版の重要性を説くものであり、スペインだけでなく、イベロアメリカ諸国の歴史、政治、経済、社会、そして文化の軌跡を理解する一つの扉になるのではないかと信じております。

「現代スペイン法入門」の技術、専門的な面も併せて強調したいと思います。法とは一つの科学であり、それ故に法の専門家、すなわち「法律家」の存在が法の基礎を作り上げるのに必要不可欠です。これは些細なことではありません。法の秩序に影響を与え、全ての社会だけでなく、経済や企業活動、日本企業のスペイン投資など海外投資の基盤にもなっています。法律というものは社会に役立つ為にならねば、今日の社会や経済を公正に規制しています。つまり短期的な目標達成にのみに焦点を当ててはいけません。シセロンの言葉を引用すると、我々は「自由になるために法の使用人になる」のであって、自由尊重の観点から見れば、法律家はその意味において重要な役割を果たしていると言えるでしょう。

結論を申し上げますと、様々な理由から本作品「現代スペイン法入門」の出版は大変意義があり、貴重なことなのです。日本において初出版となったのと同時に、専門家が参加しての学問書であるということもその理由の一つです。そして最も特筆すべきは、専門家でない日本の読者の皆様にもスペインを更に理解してもらい、歴史、政治、経済、社会、文化、そして公的機関および民間企業の変遷の背景を見て頂けるという点でしょう。本作の出版により、皆様の知識がより深まり、スペインと日本の相互理解が更に強化されることを心より願っております。

カルロス・アベリャ・イ・デ・アリステギ
駐日スペイン大使館
文化担当参事官

書評 ピオ・バローハ『知恵の木』 片倉 充造

スペイン文学史上ピオ・バローハ(1872~1956)は、「1898年」の国家衰退に際し再建に乗り出した知的革新グループ「98年世代」の代表的作家の一人として位置づけられる。

バローハによる『バスク幻想』(1902、長南実編注、芸林書房、1985)は、外国語学部の講読教科書として長年使用されてきた名品でもある。「アンヘルス」での“緑の海の白銀の航跡”という情景は、評者には1960年代大阪港のスケッチを呼び覚ましてくれる。

表題書『知恵の木』(*El Árbol de la Ciencia*, 1911)は、書き出しの1章だけでもソル、アトーチヤ通り、アントン・マルティン広場など首都マドリドに実在する馴染みの地名や、科学者名(パスツール、リービヒ等)、作家名(ソリーリャ、エスブロンセーダ)が登場する、医学生A.ウルタードを主人公としたリアリズムの青春小説である。

ここでもバローハの文体は、何よりも簡潔をもって代表される。四六版300頁超(訳書)=7部53章という区分は、およそ6頁で一つの纏まりを叙述することになる。
・ほとんどが会話体で覆われている章(2部うじ虫たち5さらにルルーについて)、・知的問答が続く章(4部尋問の章)や、・冒頭より改行が集中する章(5部地方での実

験8ジレンマ)などは、独自の簡明な筆致を特徴付ける好例である。

作家バローハの観察力は極めて高い。個人の日記を3人称で綴り直したような淡々とした場面が、無駄なく綿密



『知恵の木』 ピオ・バローハ
訳・前田明美
水声社 (2009)

に描出されている。周囲の人物も的確に捉えられ、その洞察力はなお深い。「ルルーは機知に富み抜け目がなく、人を惹きつける何かがあるのかもしれないが、女の子の一番の魅力である(…)ウルタードには思えた。それは労働や貧しさ、そして頭のよさがもたらす負の産物だった。」(2部1ミングラニーリャス家、p.76)の記述には、主人公(作家)の医師としてのまた科学者としての特性が窺える。

「5部地方での実験」「6部マドリドでの実験」とあるが、ともに医師(医療関係者)として地域社会に貢献を重ねる日常生活の実践を指す。実人生においてマドリド大学で医学を修め、後年文学へと傾斜した経緯からす

れば、これはクロード・ベルナール『実験医学研究序説』(1865)を基底とした、〈観察〉と〈実験〉を技法とするエミール・ゾラの『実験小説論』(1880)を意識した用語なのだろう、と評者は推測する。

かたくら・じゅうぞう

天理大学教授スペイン・ラテンアメリカ文学

片倉 充造

かたくら じゅうぞう

天理大学国際学部言語教育研究センター教授。

天理大学アメリカス学会会長。

『スペイン学』編集委員。

専攻: スペイン・ラテンアメリカ文学。

著書: 『ドン・キホーテ事典』(共編、行路社2005)、『ドン・キホーテ批評論』(南雲堂フェニックス2007)、『スペイン・ラテンアメリカ図書ファイル』(沖積舎2009)、『スペイン文化事典』(項目執筆、丸善2011)他。



Juzo Katakura

〒541-0041
大阪市中央区北浜4-3-1
淀屋橋Odon 1F
Tel・Fax 06-6223-2224

FARO D EL PONIENTE

OLA
EL PONIENTE

〒553-0003
大阪市福島区福島
1丁目1-48-F Hotarumachi
Tel・Fax 06-6453-9191

EL PONIENTE

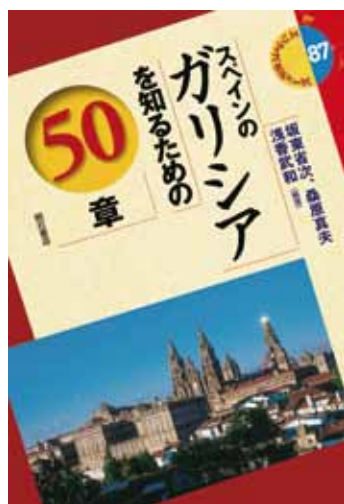
〒541-0041 大阪市中央区
北浜2丁目1番21号
つねなりビル1F
Tel・Fax 06-6220-6868

CARBÓN
炭火 西班牙料理「カルボン」
〒541-0041
大阪市中央区北浜4丁目4番12号
住友商事淀屋橋ビル1F
Tel・Fax 06-6220-4848

EL PONIENTE GOZO

〒541-0046
大阪市中央区平野町1丁目6番11号「平一ビルディング」1F Tel 06-6204-6606

エリア・スタディーズ 87 スペインのガリシアを知るための50章



【編著】坂東省次、桑原真夫、浅香武和 【発行】明石書店 【価格】2,100円(税込)
【仕様】四六判／352頁 (2011年2月刊行予定)

この度、明石書店から刊行された『スペインのガリシアを知るための50章』について、編著者の一人として本書を紹介させていただきたい。ガリシアについて、これまで日本で発行されたものは数えるくらいしかない。ただ、サンティアゴ巡礼については、近年ブームと相まって多くの書や写真集が発行されているようだ。

明石書店が発行する「・・・を知る」シリーズは、大きな書店の本棚や大学生協の書店に並んでいて外国を知るための書籍として、私にとってはいつも気になる本であった。これまで86冊が刊行されていて、それぞれの国についての歴史や社会事情を中心にまとめられている。

エリア・スタディーズ87として刊行された本書は、スペインのなかのガリシアという地方を扱った書としては最初のものである。このシリーズは、基本的には国を扱うものであったが、今回は地方を扱ったわけである。ガリシア(またはガリチア)という場所は世界にスペインとウクライナからポーランドにまたがる地域(旧ハプスブルグ帝国領)の二ヶ所存在する。スペインのガリシアは、ケルト文化の影響を受け、固有の言語であるガリシア語が使われている特異な興味ある地域である。中世紀にはカITEイーガスと呼ばれる抒情詩が花開いた。1250年頃に認められたマルティン・ゴダックスの詩は単旋律の楽譜をともなった柔らかな美しい調べである。

私は1980年代から少数言語として日の目を見ないガリシア語の研究を始めさまざまな視野から分析を行っている。ガリシア語は、これまでスペイン語の方言とされていたが、1977年制定のスペイン憲法には、ガリシア語はガリシア自治州の公用語と規定された。現在、ガリシアの人口270万人のうち150万人ほどが常に使用している。日本では、サンティアゴ巡礼路について、カミーノ・デ・サンティアゴ友の会もあり少しは知られているようですが、それ以外は殆ど知られていないのが現状である。このたび多くの賛同者を得て本書を上梓することができたことは、日本の読者にガリシアの全てを知っていただける機会であり、この上ない喜びである。

本書の構成は、総論第一章「ガリシアとは」から始まり、第II部 歴史、第III部 宗教と巡礼、第IV部 文化と生活、第V部 言語と文学、第VI部 政治と経済の50章から成る。各章2,400字程度で執筆者がコンパクトに記し、関連写真を一葉入れた。このほかにコラムとして、ガリシアに滞在あるいは旅行した人が1,200字ほどで記した珠玉のエッセイが20編ある。これがなかなかガリシアを惹きつけるものである。参考文献にはガリシアで刊行されている一般書や専門書をあげた。最後にガリシア関連の年表を付けてケルト時代から現在までをうかがい知ることができる。

浅香武和

浅香武和

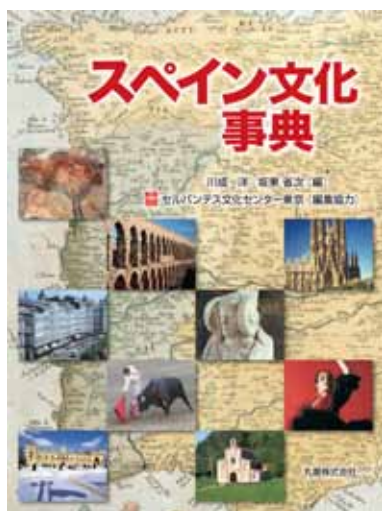
あさかたけかず / Takekazu Asaka

津田塾大学スペイン語講師、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学ガリシア語研究所外国人研究員、日本学術振興会研究員(ガリシア語)。

著書に『現代ガリシア語文法』、『ガリシア語基礎語彙集』、『ガリシア語会話練習帳』の三部作大学書林。

編著に『スペインとポルトガルのことば』同出版社、編訳書に『ガリシアのうた+CD』DDP出版。

スペイン文化事典



【編】川成洋、坂東省次 【編集協力】セルバンテス文化センター東京
【発行】丸善株式会社 【価格】21,000円(税込) 【ISBN】978-4-621-08301-7
【仕様】A5判 860頁 (2011年1月刊行)

日本がスペインと最初に出会うのは南蛮時代のことである。当時スペインは、7つの大海を支配し、世界に「太陽の没することなき大帝」と謳われた栄光の国であった。しかし、わが国が長い鎖国を解いて世界に向かって開国して再会したときのスペインは、すでに大国の座をイギリス、フランス、ドイツ、アメリカに譲っていた。12世紀ルネサンスの先進基地として西ヨーロッパに眩いばかりの知の光芒を放ち、16・17世紀にはヨーロッパ文化史上に燦然と輝く「黄金世紀」を生み出したにもかかわらず、近代物質文明に乗り遅れたばかりに文字通りヨーロッパ辺境の地となり、「ピレネーの南はヨーロッパではない」と賤しめられ、エキゾチックな国、神秘的国、謎の国などと揶揄されていたのである。近代化を目指すべく欧米先進諸国に傾注した日本が、スペイン南部をスペインと誤解して、「情熱の国」「太陽の国」「フラメンコの国」といったステレオタイプのイメージを抱え込んだのも当然の結果であった。スペイン内戦(1936～39年)終結から70年、フランコ独裁政権(1939～75年)崩壊からすでに35年、わけでも1986年に悲願のEC加盟を果たした民主国家スペインは、辺境の地の汚名返上とばかりに、ヨーロッパの一員としてダイナミックな変革・改革を行ってきた。その結果、1992年には「スペイン・イヤー」と呼ばれた最盛期を迎え、2002年にはEUの単一通貨ユーロの導入の第一陣に加わり、GDP世界第8位の経済大国にまで成長したのである。そんな中で、従来のステレオタイプ化された

スペイン像では捉えられない「新しいスペイン」が誕生してきているのである。

それにしても、新しいスペインの登場で古いスペインが消滅したわけではなく、例えば、伝統のスペインを代表するフラメンコは強烈にその存在を示し続けており、加えて新しい時代に則した進化も遂げているようである。果せるかなというべきか、いまや、新しい視点から見たスペイン文化情報が必要になっている。

本書の最大の特色はなんといっても、新しいスペインと伝統のスペインの両面を十分に勘案し、総合的かつ立体的なスペイン文化の知識や情報を提供することにある。そのために本書では、スペイン文化のさまざまなテーマを「中項目主義」のスタイルで解説する方針を貫いている。小項目主義では情報がもの足りなく不十分であり、また大項目主義では情報過多で内容も専門的、あるいは論文調になり読んで退屈してしまうだろう。中項目主義では情報量が適度であり、読んで楽しく内容が理解できると考えたからである。本書はカラーの口絵、本文、および巻末付録(歴史年表・地図・世界遺産一覧・パドロー一覧・読書ガイド)で構成され、総勢150名の内外の研究者が執筆に参加している。

本書の章立ては「スペインという国」、「文化・文化現象・ファッション」、「美術・芸術」、「建築・彫刻」、「音楽・映画」、「フラメンコと闘牛」、「食文化」、「スポーツ・教育」、「文学・メディア」、「知識人・知的活動」、「言語・国民アイデンティティ」、「社会・経済・政治・宗教」、「歴史」、そして「世界遺産・遺産」の14分野で構成されている。これら14分野がさらに合計363の項目に細分化されており、それぞれの項目は基本的に見開き2頁で、小見出しが付けられ、関連写真が基本的に一葉掲載され、とても読みやすいレイアウト構成になっており、イスパノフィロ(スペイン大好き人間)のみならず、初学者から異文化コミュニケーション研究者に至るまで、幅広い読者のニーズに応えられる内容になっている。

丸善出版事業部・企画編集部・小林秀一郎

日本・スペイン交流史



【編】坂東省次、川成洋 【発行】れんが書房新社 【価格】6,300円(税込)

【ISBN】978-4-8462-0377-1 【仕様】A5判 532ページ 上製本 (2010年12月刊行)

ザビエルからコミック文化まで—『日本・スペイン交流史』の執筆にかかわって

念願の『日本・スペイン交流史』が、昨年暮れようやく刊行の運びとなった。執筆者の一人として手前みそではあるが、本書の意義と意図、またこれからの課題といったことについて述べさせていただく。

本書は「近世初期の交流史」と「幕末・明治以降の交流史」の二部構成になっている。第一部(全8章)が各章をおおむね時系列に配列しているのに対し、その倍以上の分量がある第二部(全20章)は分野別(芸術、外交、言語・文学、産業・情報、人物往来)に配されている。古い時代の話より現代に近い時代の記述の方が長く詳しくなるのは当然と言えばそうなのだが、両時代についての研究の蓄積をそのまま反映させれば、第一部、第二部のページ配分は逆転したものになったろう。

別の言い方をすれば、第一部では、この時代に関わる豊かな研究成果を思い切って8章に圧縮し、日本人とスペイン人の最初の出会いを可能にした大きな時代状況と、それが最終的に関係途絶という結果に終わるまでの「流れ」が際立つよう心がけたつもりである。とくに重要なのは、16・17世紀に日本人が列島を越えて活動する空間と、スペイン人が半島を越えて活動する空間が、東・東南アジアの海域世界で重なっ

ていたことである。時間枠としては、マニラを窓口にした日西関係が本格化した1580年代より以前、ポルトガル人が種子島に来航した1543年から、1624年の徳川幕府とスペインの断交をへて、ポルトガルがオランダにとって代われ、鎖国体制が完成する1640年前後までを展望した。

これに対して第二部は、研究の蓄積の差に加え、「大航海時代」のような、両国が共有した歴史の舞台(ましてスペインはその“主役”の一人!)を見いだせないということが、作業を困難にさせた。そこで今回は、両国の接点をなるべく多く紹介し、本書を新たな「出発点」として今後の研究の深まりを期すことにした。そのおかげで、多様な読者のさまざまな角度からの興味にこたえられる構成にもなり、結果的には良かったと思う。

もちろん課題は残る。歴史学ではむしろオーソドックスな分野と言われる政治・外交史もそのひとつで、1868年の国交回復から、研究者の関心が集中する内戦~大戦期の間の明治・大正期—その間、米西戦争(1898年)によりスペイン領フィリピンが消滅する—など、埋めるべき空白は多い。

最後に、日本とスペインの交流史は、日本や日本人の姿、日本文化が—ときに多くの日本人の知らないところで—スペイン人に伝えられる歴史でもあることに、あらためて気づく。ザビエルら宣教師や航海士の記録しかり、19世紀バルセロナを中心にわき起こったジャポニスム、さらには昨今のコミック・アニメ人気しかりである。考えてみればそれは、16世紀初頭、マルコ・ポーロの「ジバング」がスペイン人航海士たちによって再認識されたことにさかのぼる。ちなみに本書の帯では、日西交流の歴史を「500余年」としている。「いや、1549年のザビエル来航にさかのぼっても460余年では?」と思われる向きもあろうが、それはこうした展望によるのであり、決して販促をねらった「キリのいい数」というわけではない。念のため!

椎名浩

椎名浩

しいなひろし / Hiroshi Shiina

1966年熊本生まれ。中央大学大学院修了。熊本学園大学講師。

専攻: スペイン中・近世史。

共著: 『スペイン検定』(南雲堂フェニックス、2008年)、『スペイン文化事典』(丸善、2011年)。

論文: 「15世紀末のセビーリャにおける都市・王権関係の一側面」(『スペイン史研究』20号、2006年)、「16世紀スペイン語文書の日本記述における「権力・空間」イメージについての一考察」(『イスパニア図書』11号、2008年)ほか。

ANCA
uropea

Sa





ビセンテ・デル・ボスケ インタビュー

サラマンカでは、青少年のスポーツ振興のため、この都市出身の現サッカースペイン代表監督、ビセンテ・デル・ボスケの名を冠したプログラム、『ビセンテ・デル・ボスケ・キャンパス』が開催されています。今年は、現地の語学学校コレヒオ・デリーベスの協力のもと、スペインのみならず世界中からこのプログラムに参加できるようになりました。

本誌acueductoは、コレヒオ・デリーベスを通じて、元サッカー選手、現スペイン代表監督であるビセンテ・デル・ボスケ氏にいくつかの質問を投げかける機会に恵まれました。

acueducto (以下A): 多国籍の学生が参加すれば、このプログラム(ビセンテ・デル・ボスケキャンパス)は豊かになるとお考えですか。

Vicente del Bosque(以下V): もちろんです。文化交流はいつでもものごとを豊かにしますが、スポーツを通じた文化交流は、さらに良い結果をもたらします。スポーツは教育的です。

A: ビセンテ・デル・ボスケキャンパスに参加する生徒たちは、主にどのようなことを身につけられるとお考えですか？

V: 生徒達がこのキャンパスで身につける事は、スポーツと関わりがあります。交友関係が広がること、競争力がつくこと、人の考えに耳を傾けるようになること、根気、向上心、言動一致、責任感、謙虚、努力、友情などです。

A: 昨年のサッカーのワールドカップの優勝によって、外国におけるスペインのイメージも変わったでしょうか。

V: 確かにスペインの存在が大きくなりました。優勝はスポーツの世界を超えて一般社会に広がりました。

A: 最後に、日本がサッカー大国になるには何が必要でしょうか。

V: 私は2000年にレアル・マドリードの監督であったとき、日本のチームと一戦を交える機会がありました。アジアのサッカーは進化を続けていますし、将来性があります。豊富な資金、立派な施設に加えて選手は技術面でも体格でも優れています。

(文・写真提供 Colegio Delibes)



Vicente del Bosque

ビセンテ・デル・ボスケ

1950年12月23日生まれ

サラマンカ出身。

スペインの元サッカー選手。レアル・マドリードやスペイン代表チームなどでプレーした。

現役引退後は、監督として活躍。1999年から2003年まではレアル・マドリードで指揮をとり、2008年からはスペイン代表監督を務める。

はじめてのスペイン語講座

第4回 動詞TENERの使い方



Hola. みなさんこんにちは。

『はじめてのスペイン語講座』も早いもので4回目です。

前回は直説法現在形の規則動詞について勉強しましたが、今回は不規則動詞<TENER>について勉強したいと思います。

TENERは【持つ】という意味の動詞ですが、非常に良く使われますので、まずは右の活用形を頭に入れて下さい。

右の表の中で、斜体で表している活用形が不規則な活用をするもので、赤字の部分が規則動詞の活用形との違いです。

ごらんの通り、不規則活用は一人称複数形と二人称複数形以外の全てに出現します。間違えずに覚えて下さいね。

	単数		複数	
	主語代名詞		主語代名詞	
一人称	Yo	私は	<i>tengo</i>	Nosotros 私たちは Nosotras
二人称	Tú	君は	<i>tienes</i>	Vosotros 君たちは Vosotras
三人称	Él	彼は	<i>tiene</i>	Ellos 彼らは
	Ella	彼女は		Ellas 彼女らは
	Usted	あなたは		Ustedes あなた方は
				<i>tenemos</i>
				<i>tenéis</i>
				<i>tienen</i>

TENER 動詞 - 直説法現在の活用

①TENERは、日本語の「持つ」という動詞同様、所有を表す事が出来ます

例)

Yo tengo un libro.

私は 持つ 一冊の本

私は(一冊の)本を持っています。

Ella tiene una maleta.

彼女は 持つ 一つのスーツケース

彼女は(一つの) スーツケースを持っています。

では、次は実際に動詞TENERを活用する練習をしてみましょう。

例題



Mi abuela
(私の祖母)

+



un bolso
(一つのバッグ)

解答

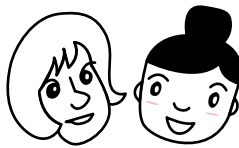
Mi abuela tiene un bolso.

【私の祖母は(一つの)バッグを持っています。】

解説

Mi abuela (私の祖母)は、3人称単数形に相当しますので、TENER動詞はtieneと活用します。

1.



Laura y Yoko
(ラウラとヨウコ)

+



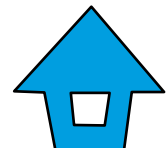
tres camisetas
(3枚のTシャツ)

2.



Jorge
(ホルヘ)

+



una casa
(一軒の家)

解答

1. **Laura y Yoko tienen tres camisetas.** 【ラウラとヨウコは3枚のTシャツを持っています。】

2. **Jorge tiene una casa.** 【ホルヘは一軒の家を持っています。】

解説

1. 主語の“Laura y Yoko”は、3人称複数形のEllasに相当します。従って、活用形はtienenを使います。

2. 主語の“Jorge”は、3人称単数形のélに相当しますので、活用形はtieneを使用します。

②日本語では「持つ」という動詞を使わない場合でも、TENERで表すことができます。
例を見ながら覚えていきましょう。

例) 家族構成を表すとき:

Yo tengo un hermano. 私には兄(弟)が一人います。
私は 持つ 一人の兄(弟)

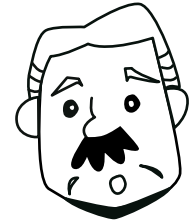
予定を表すとき:

Ellos tienen un examen mañana. 彼らは明日
彼らは 持つ (一つの)試験 明日 試験があります。

身体的特徴を表すとき:

Ella tiene el pelo largo. 彼女の髪は長い。
彼女は 持つ 髪の毛 長い

Tú tienes barba. 君にはあごひげがある。
君は 持つ あごひげ



Mi abuelo tiene bigote.

(私の祖父には口ひげがあります。)

Pero él no tiene barba.

(しかし彼には顎ひげはありません。)

もう一つ、覚えておくと便利なTENERを使う重要表現があります!
それは、『年齢の言い方』です。スペイン語では、『～歳です』という時にもTENERを使って表します。

preng 覚えましょう!

- ¿Cuántos años+ TENER + (主語)?

『(主語)は何歳ですか?』

- (主語) + TENER + ~año(s).

『(主語は)～歳です。』

¿Cuántos años tiene tu hija?
(あなたの娘さんはいくつですか?)



Ella tiene 1 año.
(1歳です。)



例) - ¿Cuántos años tienes?
あなたは何歳ですか?
いくつの 歳 持つ

- Yo tengo 55 años. 私は55歳です。
私は 持つ 55歳

最後に、日常生活でよく使われるTENERを使った表現をいくつか紹介します。
慣れてきたら、実際に使ってみてくださいね。

- (主語) + TENER

calor 【暑さ】: (主語が)暑さを感じる/暑い

frío 【寒さ】: (主語が)寒さを感じる/寒い

hambre 【空腹】: (主語が)空腹である

sed [(のどの)渇き]: (主語は)のどが渇いている



スペイン語

ADELANTE

www.adelante.jp

- ・一般・旅行・商業・DELE検定対策・プライベート
など目的やペースに合わせて選べるコース
- ・ネイティブ講師だからプチ留学気分
で自然なスペイン語がマスターできる!
- ・振替ができるので忙しくても安心!
- ・月謝払いOK!
- ・無料体験レッスン、教室見学等☆随時受付中

スペイン語教室 ADELANTE
〒530-0001 大阪市北区梅田 2-5-8 千代田ビル西別館 2F
TEL/FAX: 06-6346-5554
E-mail: info@adelante.jp・http://www.adelante.jp

イラスト: 田中 文子

LECCIÓN DE ESPAÑOL

スペイン語講座(Ⅳ) 無人称表現について

今回の号では無人称の表現を扱います。そもそも無人称とは何でしょうか。

既にご存知のようにスペイン語の動詞は原則、6通りに変化します。

例えば、comerだと

現在形でcomo, comes, come, comemos coméis, comen

過去だとcomí, comiste, comió, comimos, comisteis, comieron

と主語をつけなくても6通りの語尾変化から「私」、「君」、「彼」…、がわかってしまいます。

一方、日本語では人称による変化はありません。もっとも敬語による言い換えはあるので、一部の動詞では主語が推測されてしまうことはあります。例えば、申しますと言えば「私が」で、「仰いました」と言えば、「目上の人が」などと考えられることはあります。

話を戻しまして、基本的には日本語の動詞は主語に関しては「無色」なので、わざわざ主語を言わなければ自動的に無人称の文になります。スペイン語でこの「無色感」を出すにはどうしたらよいのでしょうか。いくつかの方法があります。簡単なものからどうぞ。

Tienes que limpiar la habitación.

(君は部屋を掃除しないといけない。)

Hay que limpiar la habitación.

(部屋を掃除しないといけない。)

《Tener que + 不定詞》と《Hay que + 不定詞》は「～する必要がある」と同じ意味です。しかし、前者は活用をしなければならないのに対して、後者は活用がありません。つまり、「誰かが部屋を掃除しないといけない」と言っている無人称なのです。もっとも、他に第三者がいないシチュエーションでこのように言われると、「お前が掃除しろよ」と言われているようでカチンとくるかも知れませんね。

次に簡単なのは英語と同じですが、《3人称複数》を使ったものです。

Dicen que va a nevar esta tarde.

(今日の午後雪が降るそうだ。)

あえてellosなどを入れないで動詞だけにするのがポイントです。もちろん、動詞の活用形からは「彼ら」とか「彼女ら」などの形なのですが、それがわからないので、「一般に」とか「人々は」という意味が感じられるのです。

「一般に人々は～と言っている」→「～そうだ」となります。もうひとつ例文です。

Me han robado la cartera. (私は財布を盗まれた。)

文法的には、「彼らは私に対して財布を盗んだ」なのですが、主語は言っていません。

つまり、「誰かわからない彼らが私に対して財布を盗んだ」

→「私は財布を盗まれた」となります。

この場合の3人称複数は「人称臭さを消す手段」ですから、実際には泥

棒が1人だったと思っていてもあえて3人称を使うのです。

Llaman a la puerta. (誰かが玄関で呼んでいる。)

ここでも同じことですね。宅配便配達の人とは通常1人です(特に大型の荷物を除いて)。でも、1人だと思っていても「誰かが呼んでいる」の時は3人称複数を使います。

次なる手段が、《se + 3人称単数》です。

これは、se受身と似ていて曖昧です。この2つを混同してしまい、よく違いがわからないという質問が多いのですが、実はそれで当たり前なのです。違いは、受身の方は《se + 3人称単数・複数》と動詞の活用が3人称複数でもあり得る点です。例文を見ていきましょう。

En este restaurante se come bien.

(このレストランはおいしい。)

よく初級の教科書で見かける例文です。Se=「人々は」と考えればわかりやすいですね。

「人々はこのレストランで旨く食べる」→「このレストランはおいしい」

目的語をとともうこともあります。

Anoche se conoció a los nuevos ministros del tercer Gobierno de Kan. (昨夜、第3次菅内閣の新閣僚がわかった。)

この例では、seは「人々は」です。se受身ではないのかと思った人はいませんか。残念でした。よく似ていますが、主語が見当たらないので違います。a los nuevos ministrosと目的のaがついているので。もし受身にしなければ、aを取って主語にし、動詞を主語に合わせて複数にします。se conocieron los nuevos ministros... ただ、お勧めはできません。se conocieron los nuevos ministros...だと「新閣僚たちはお互いに知り合った」という意味にもなってしまい、曖昧だからです。

その次は、《uno》を使ったものです。unoは数字の「1」ですが、ここでは「1人の人」です。ですから女性形unaになることもあります。

Con el paso del tiempo uno se acostumbra a todo.

(時間が経てば人は何にでも慣れるものです。)

ここでは、se無人称は使えません。もともと「慣れる」がacostumbrarseと再帰なので、seを使おうとすると、*se se acostumbra...となってしまうからです。

また、unoは自分のことを暗示していることがあります。

Uno nunca se aburre contigo.

(君となら誰も退屈しないよ。)

この例では、「誰も」とは言っていますが、本当は「自分は」(Yo no me aburro...)と言いたいのかもかもしれません。テレ隠し?

最後に、《túの無人称》を見ておきましょう。この用法は文脈により判断するしかありません。

- *Nunca he estado en Sevilla, pero eres de ahí, ¿no? ¿Qué tal en verano?*

(セビージャには行ったことないけど、君はそちらの出身だろ？夏はどう？)

- *Pues hace un calor que te mueres.*

(まあ、死にそうなくらい暑いよ。)

Si metes el gol y ganamos, eres un héroe y te aplauden. Pero si fallas, te abuchean.

(ゴールを入れて勝てばヒーロー、大喝采。でもハズせば、ブーイングだぜ。)

túを無人称的に使うと、聞き手を話に引き付けるような効果がありますね。

また、túが暗黙のyoを指していることもよくあります。最後の例はまさにそうですね。話し手はあるサッカー選手でスポーツ雑誌のインタビュアーに向かってしゃべっています。

Si yo meto el gol y ganamos, soy un héroe y me aplauden...と言い換えればわかりやすいでしょう。

スペイン語の無人称表現はまだあります。

でも時間が来たようなので今日はこれくらいで。 ¡Hasta la vista!



仲井邦佳

なかいくによし/Kuniyoshi Nakai

立命館大学産業社会学部教授・スペイン語部会長。

京都イスパニア学研究会会長。専門はスペイン語学。

著書に『コミュニケーションのためのスペイン語』(第三書房)、『中

級スペイン語 一文法と演習一』(同学社)などがある。

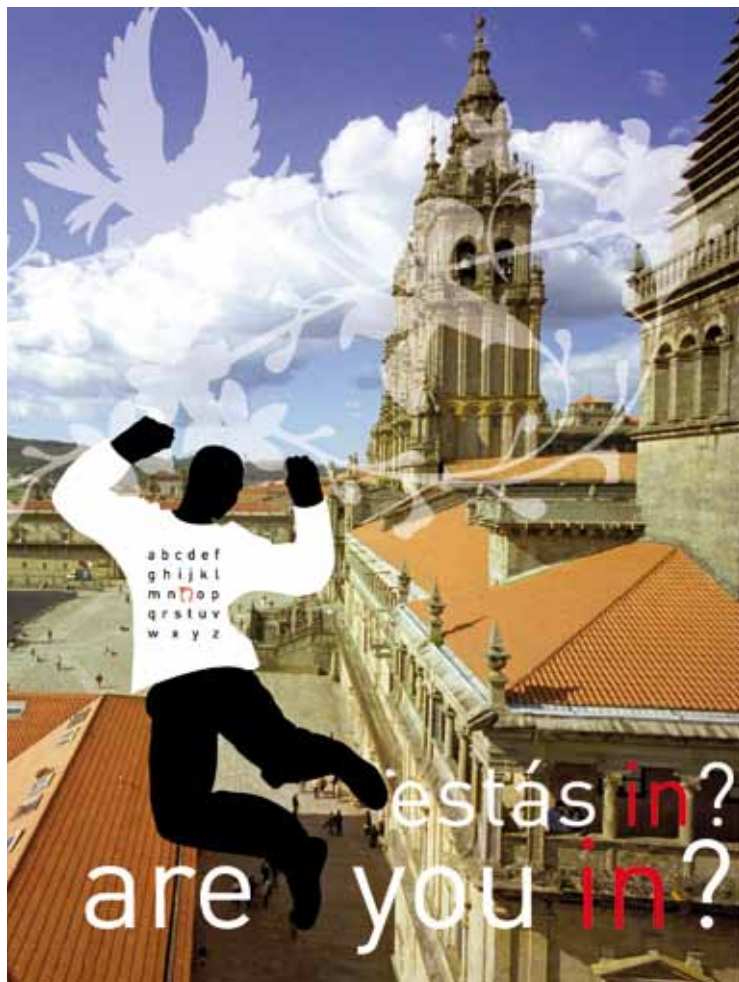


スペイン語学習テキスト
お問合せはアデランテまで。

スペイン
中南米への
留学相談
入学手続き
無料サポート!

06 - 6346 - 5554

www.spainryugaku.jp



楽しくて、住みやすい歴史ある大学都市でスペイン語を勉強してみませんか？

サンティアゴ・デ・コンポステラは、そんなあなたにピッタリの街です。

サンティアゴ・デ・コンポステラ大学は、500年以上の長い歴史を持ち、質の高いスペイン語プログラムで評判の高い教育機関の1つです。

経験豊富な講師陣と多彩なコース内容で、直接スペイン文化に触れながらスペイン語を学ぶまたとない機会に、素晴らしい経験を保証いたします。

学生ひとりひとりのニーズに合ったコースが選べるように様々なコースを提供します。一年を通して学習できるコースの一部は下記のとおりです。

- スペイン語・文化コース
- 個別対応コース：商業スペイン語、スペイン語と健康科学、スペイン語と環境学、食文化とスペイン語、観光とスペイン語、サンティアゴ巡礼コース

さらなる詳細については、インターナショナル・コースのホームページwww.cursosinternacionales.usc.es (日本語) をご覧いただくか、linguas@usc.esまでご連絡ください。

サンティアゴ・デ・コンポステラ大学、インターナショナル・コース事務局
Avda. Das Ciencias, chalet Nº 2. Campus universitario sur
E-15782 Santiago de Compostela. España
www.cursosinternacionales.usc.es . linguas@usc.es
Tel: +34 981 597 035 Fax: +34 981 597 036



サンティアゴ・デ・コンポステラ大学スペイン語コース

フラメンコ、地中海のビーチ、闘牛、パエリアなど、スペインといえば常にあげられる話題の他に、これらのイメージをもって訪れた者たちを驚かせるEspana verde (エスパーニャ・ベルデ:緑のスペイン)と呼ばれる自然環境に恵まれたスペイン北部地方があります。

中でも、ガリシア州はスペインの大西洋側に位置し、昔、ローマ人により太陽が死ぬ場所と考えられていたヨーロッパ最西端の地、「地の果て」を意味するフィニステレがあります。

日本において、ガリシア州の州都であるサンティアゴ・デ・コンポステラをご存じの方は、そこが千年来の巡礼路であるカミーノ・デ・サンティアゴの最終目的地であるということでしょう。サンティアゴ巡礼路を歩き、コンポステラに到着した日本人巡礼者達は、日本から遠く離れた文化的に異なる場所にいるにもかかわらず、意外にも見慣れた風景を発見します。

50年以上前からインターナショナル・コースが提供する外国人向けのスペイン語・文化コースを受講するためサンティアゴ・デ・コンポステラ大学に来る日本人学生も同じような印象を持ちます。

日本と同様、ガリシアにおいて海の影響は、地理や文化、その土地に住む人々の生活の糧に影響を与えます。この海の文化に由来する共通の特徴は、世界的に知られた種類豊富で品質の高い魚介類です。東京の魚市場、もしくはサンティアゴ・デ・コンポステラのアバスト市場を訪れることは地元の文化に溶け込むユニークな経験となるでしょう。



アバスト広場(サンティアゴ・デ・コンポステラ)

また、穏やかで訪れる人を温かく受け入れ歓待し、シャイで少し曖昧なところがあるガリシア人の性格は、日本人の性格と似ています。美術や建築、そしてその他の文化の中に表現される伝統と新しさの融合、世界遺産に登録されているサンティアゴ巡礼と熊野古道は姉妹巡礼道となっており、日本とガリシアにおける文化交流の懸け橋となる点です。

宗教的、精神的、文化的な理由、またある種の冒険を求めて世界中から訪れる巡礼者たちは、サンティアゴ巡礼路—EUのヨーロッパ文化ルートとしても認定されている—を通じて何世紀もの間、サンティアゴ・デ・コンポステラの街で合流してきました。巡礼路は、出会いや発見の場所であり、最終目的地であるサンティアゴの街は、全ての人に開かれた国際都市として知られています。こういった特徴から、大学の外国人向けスペイン語コースを提供するインターナショナル・コースでは、種類豊富なスペイン語・文化コースに加え、サンティアゴ巡礼路にフォーカスした特別のコースを提供しています。このコースでは、教

室でスペイン語や巡礼路に関する文化を学ぶだけではなく、実際に巡礼者となって巡礼路の魅力を体験する内容になっています。



巡礼中の学生グループ

日本からは、関西大学、神戸市立大学、天理大学、和歌山大学、秋田国際教養大学、そして東京のセルバンテス文化センターからの学生が、ここサンティアゴでスペイン語コースを学びに多くやってきます。国際色豊かな環境のもと、平均して4週間のスペイン語コースを受講しています。

彼らがサンティアゴで勉強する際に高く評価するのは、治安の良さ、物価の安さ、種類豊富な文化プログラムやイベント、大学都市、活気のある旧市街の雰囲気、ホストファミリーであるガリシア人の人柄です。夏には、花火や展示会などあらゆる種類のイベントが催され、毎日街のどこかで行われる演奏会などお祭り一色になるサンティアゴの街に多くの学生が驚きます。

サンティアゴ・デ・コンポステラ大学のインターナショナル・コースでは、一年を通してスペイン語・文化のレギュラー・コースに加え、学生の要望に応じて個別対応コースも提供しています。またスペイン語目的別コース(EFEコース)ではスペイン語の語学学習と観光、ビジネス、健康学、環境学、国際関係または食文化といったテーマの専門的スペイン語学習を組み合わせ、各分野に携わる企業や機関へのインターンシップも行います。

夏季コースのプログラムは、大学の専門講師による週20時間のスペイン語の授業に、午後にはコースのアカデミックな内容を補完するものとして、ガリシア文化に触れるワークショップ、大聖堂や歴史の色濃い市街区や美術館巡り、スペイン映画の上映や、講演会、グルメツアー、週末の小旅行やスポーツ活動など余暇のアクティビティーが含まれます。スペイン人学生との交流はもちろん、ヨーロッパ、アメリカ、カナダ、ブラジルからの学生など、夏季コースでは最大40カ国からやってくる学生と共にスペイン語を勉強します。1クラス最大15名と限られ



た人数での授業では、学生間の活発なるコミュニケーションを促進し、異なる文化を持つ学生間での意見交換はスペイン語の学習をさらに豊かなものにします。学生から特に評価が高いのは、コミュニケーションに重点をおいたスペイン語教授法に、ボランティア活動やハイキング、そしてスポーツなど学生各自が選べる自由活動です。



スペイン語の授業風景

サンティアゴ・デ・コンポステラ大学にて始動した目的別スペイン語コースにおいて、日本人学生が特に興味をしめしているコースはスペイン語と食文化コース、そしてスペイン語と巡礼コースの2つです。最初のコースは、スペイン語と文化の学習に食文化への専門的スペイン語学習を合わせたもので、専門家によるセミナーや実際にスペイン料理を作ります。二つ目の巡礼コースでは、千年来の巡礼路の様々な側面（歴史、美術、文学、地理、食文化と現代）から勉強し、スペイン語の

大学の学長室 背景;サンティアゴ大聖堂(写真左上)／市内見学中の学生グループ(写真右上)
東京からの学生グループ ガリシア文化のパーティーにて(写真左下)／サンティアゴ・デ・コンポステラ大学の図書館(写真右下)



サンティアゴ巡礼を歩く外国人学生

ブラッシュアップを組み合わせたコースです。コースの後半は、実際に巡礼者となって講師の付き添いのもと巡礼路の最終区間を歩きます。

短期間のコースを受講した幅広い年齢層の日本人学生の多くが、次の年により長い滞在期間でスペイン語を学ぶためサンティアゴ・デ・コンポステラに戻ってきます。これは、彼らが街や大学で過ごした最初の経験を高く評価していることの現れです。

サンティアゴ・デ・コンポステラの魅力を発見しに是非お試しください。

ここでの経験は決して皆さんの期待を裏切りません!

サンティアゴが皆さんをお待ちしております!

Lanzada Calatayud Álvarez

ランサーダ・カラタジュ・アルバレス

Gerenta de los Cursos Internacionales

インターナショナル・コース マネージャー



ワールドカップ優勝国スペインで 世界最高レベルのサッカーを学ぼう！

サッカーの本場で自分の力を試してみたい、実践力を培いたい、スペイン語も学びながらサッカーをしたい！そんな若者に朗報がある。マドリッド郊外に本部があるGOALearningは、世界各国から集まった若者に、年間を通じてサッカー留学プログラムを企画している。ここでは、サッカーばかりでなく、宿舎を提供して各生徒に必要な学校教育まで手配しているのが特徴だ。多くの若者達は学校に通いながら数ヶ月以上滞在してサッカーも学んでいるが、今回、もっと気軽に試してみたいという日本の中高生も参加できるように、短期プログラムが企画された。2011年は3月26日～4月2日の1週間、8月1日～15日の2週間の募集で、期間中は、レアル・マドリッドなどの強豪チームとも互角に戦うアルコベンダスCFジュニアチームでの練習や親善試合も予定されている。リヴァプールFCのトーレス選手に指導経験のあるエルナンデス監督の他、経験豊富な監督やコーチの指導、リーグ戦の試合観戦も予定されており、スペインサッカーを生で感じられる貴重な体験だ。

GOALearningウェブサイト
www.goalearning.com



コース内容

- ・ 1日3時間程度の練習 (午前・午後)
- ・ 午前1時間程度のスペイン語授業
- ・ 1週間につき3日間アルコベンダスCFで練習 (午後)
- ・ 監督はじめコーチ陣によるレベルチェック
- ・ アルコベンダスC.F.ジュニアチームとの親善試合
- ・ アルコベンダス市長からの留学卒業証明書受取式
- ・ レアル・マドリッド (サンティアゴ・ベルナベウ) スタジアム観光
- ・ スペインリーグ観戦、他

お問い合わせは下記まで
yurikotakato@hotmail.com



Goalearningプログラム日本担当
高頭 百合子
たかとう ゆりこ / Yuriko Takato



1996 - 2001年 スペインサッカーチーム C.D. Lourdesに所属。SUB-16 (U-16)から始まり、スペイン女子サッカー1部リーグに昇格するまでに至る。

2008 - 2010年 India International School(東京都)でサッカー指導。6歳から16歳の男女生徒に毎週教える。

インターナショナル・コミュニティ・スクール (群馬県)の幼児クラスでもサッカー指導。

現在、Goalearningプログラムの日本担当として参加者を募っている。



フェルナンド・トーレス選手と
エルナンデス監督



ガイドブックだけじゃないスペインを知りたい人に『スペイン広報』



スペインの
旅行・経済・文化情報 季刊誌

お問い合わせ先(日西商業会議所): camara@camarajaponesa.es www.camarajaponesa.es

スペイン南東部バレンシア州に位置するアリカンテ大学のスペイン語コースへ通う、加藤優花さんにお話を伺いました。

大学でスペイン語を勉強しているので、随分前から漠然とスペインに留学するんだと思っていました。

実際準備を始めたのは1年弱ぐらい前からで、実際に申し込み作業をしたのは6ヶ月ぐらい前です。

荷物とかの準備は、ぎりぎりでした。(笑)

アリカンテ大学にしたのは開始日が沢山あって、1週間単位で申し込みができたから。でも、スペインへの留学に関する情報がやっぱり少なく、特に大学に行きたかったので情報収集に苦労しました。



まだまだ途中段階ですが、美味しいそうですね。



ホストファミリーと一緒にアロス(アリカンテ地方のパエリア)をつくっているところ。

日本の国のことを知らないと、授業についていけない!

日本の人口とか自分の国の基礎知識を勉強しておくことは重要ですね。他の国の学生はバンバン答えるんです。

物で持ってくれば良かったと思ったものは、日本食の食材ぐらいで、服とかはかわいいデザインのものがこっちで買えるので持ってこなければ良かったと思ってます。(笑)

日本食は流行もあって、スペイン人の友達が増えると必ず作って!とせがまれます。カレーなんかは死んでもいい!とまで言われました。

カレールーや焼きそばソースなどの食材は持ってきた方がいいですね。



En la playa...



今になって、もっと色んなことを学べばよかったと思う。

あと2週間ほどで留学が終了するんですが、もっと、文法だけでなく、文化や色んなコースをとれば良かったと思っています。今、文法の授業以外に文化のコースを受講してるのですが、スペインの色んなことが学べてすごく楽しいんです。

スペインに来る前に、もっとスペインのことを勉強してくれば良かったです。

そしたらもっと楽しめたと思う。もちろん日本のことも。

留学 = 人とのつながり。

スペイン語(語学)より大事なものを見つけました。

留学期間中ホームステイをしたんですが、とても満足しています。ホストファミリーの支えがあってこそ、安心して、充実した留学生活を送れたと、とても感謝しています。

大学は決して日本人が少ないという環境ではなく、最初は自分のモチベーションをあげるのに戸惑ったけれど、みんなそれぞれ違う目的で留学してきてるということがわかりました。スペイン語だけを上達させたいのではなく、文化やスペインの社会を学びにきてる人もいて、人それぞれということに気付けたのはとても良かったです。学習環境は自分次第でよくも悪くもなるもんだと思います。

それに、この留学で気がついたのが、スペイン語が上手(文法的に完璧)という事以外にもっと大事なことがあるんですよね。それは相手に対する思いやりだったり、誠実さだったり。伝えたいって言う気持ち。それは日本語でもそうなんだと思います、国籍関係なく。

私にとって留学は人とのつながりだったと思います。アリカンテ大学に留学したことでスペイン語だけじゃなくて本当に色んなものを学ぶことができたし、これからもこの経験を生かしていければと思います。

取材:アリカンテ大学語学教育センター



Universidad de Alicante

風に吹かれて、カスティーリャ

スペイン的なもの——この正体、実は結構やっかいである。よく言われることだが、「スペイン」という国を一言で表すことはできない。「太陽の国」なんて嘘であるし(ガリシアはとにかく雨ばかりだ)、「フラメンコ」はスペイン北部の人間にとってみたら“自分達のもの”ではないし、昨年のカタルーニャでの開催禁止決定にみられるように「闘牛の国」とも言い切れなくなってきた。アルハンブラ宮殿が世界に誇るイスラム文化の華なら、キリスト教の世界三大巡礼地のひとつサンティアゴ・デ・コンポステラも忘れてはいけない……等々。知れば知るほど複雑になってくるのである。ともあれ、長い歴史の中で多種多様な民族が地方ごとに違った混じり方をして——地方によってはあまり混じらずに——多彩で独特な文化・習慣を作りだしてきたのがスペイン。これは、かつてフランコ将軍が「スペインは一つである!」とスローガンをたてても変えることができなかった、この国の本質といえるのではないだろうか。

しかし。時はミレニウム前夜、前準備なしで「とりあえず来ちゃいました!」てな感じでスペインの土を踏んだ私(決して、準備が面倒だったからではない。実際スペインというところは、奇襲作戦のほうがスムーズにコトが運んだりする)はまだ、そんなことを知る由もない。しかも、最初に住んだマドリッドや、この首都が位置するカスティーリャという土地柄についてはほとんど無知であった。もっとも、先入観のない白紙状態だったのは、逆によいことだったのかもしれないが……。

マドリッドは確かに、都会ではあった。でも、パリやローマやロンドンと較べてしまうと、どこかあかぬけない印象は否めない。近郊のトレドやセゴビアといった古都からみればやはり歴史は浅い街だな、という気もしてしまう。しかし、私にとってのマドリッド体験は「街」そのものよりも「人」であった。

ここでは、街並みはもちろん堂々と存在しているのだが、そこに人々がなじみ溶け込むというよりも、まるで3D効果のように、背景からそれぞれの人間の個性がはっきりと立ちあがり、そのまま行き交っているように感じたのである。その「実在感」はしかし、他を寄せ付けないという類のものではない。逆に、「なんでもこい」という感じなのだ。そんな3Dの人々に混じってマドリッドの街を歩いていると、こちらピンと背筋が伸び、元気をもらえた。それは、寒暖の差が激しく風も強い、厳しいカスティーリャの自然に耐えて胸をはって生きてきた人々の、誇り高きオーラの力といったら言い過ぎだろうか。かのラ・マンチャの男、ドン・キホーテを見よ。

……もっとも彼の場合は、その誇り高きオーラが少々暴走しちゃってるのだが。ちなみに「風が強く吹くところでは、人間はちょっとオカシくなつち

やうのよ。ドン・キホーテが証明してるでしょ!」とは、前号のエッセイにご出演のアンヘレスの弁。彼女は時々、どっきりすることを言う。そういえば彼女はサモラの出身、れっきとしたカスティーリャっ子である。

やがて私は、そんなカスティーリャのキーワードを「野性の力」と命名したのだった。それは、異国で独り暮らし私が自らのうちに育てていくべき相棒、同志でもあった。

そろそろ、私のスペイン滞在の目的は音楽研鑽であったことを思い出そう。まず取り組むべき課題となったマエストロ・ロドリゴのピアノ曲は、譜読みから大変だった。長大な曲はないのだけれど、音が多くて細かい指さばきも必要だ。何しろロドリゴご自身もものすごいピアニストで、「見えている」ことはむしろ邪魔なのではないかしら?と悩んでしまうほどに、素晴らしく冴えたテクニックの持ち主だったのだ(前号で書いたように、マエストロは盲目であった。)しかしそのうち、独特な「ロドリゴの音」に私の耳と指が慣れてきて、暗譜もすんなり頭に入っていくようになっていった。

マドリッド生活にも少し慣れてきた頃。市立図書館で企画されたイベント「ロドリゴとアルベルティ」への出演依頼があり、ラファエル・アルベルティの詩の朗読に組ませてロドリゴのピアノ曲を演奏することになった。(ロドリゴもアルベルティも、1999年に世を去っている。)このときプログラムに選んだ作品のひとつ《4つの小品》の第一印象は、〈バレンシア舞曲〉を除いて、「カスティーリャの匂いがする」ということだった。確かに〈カレセーラス(御者の歌)〉はマドリッド出身の作曲家チュエカに捧げられているし、〈安宿のファンダンゴ〉もカスティーリャっぽいなと感じてはいたが、それはまだ漠然とした感覚であった。

そんなある日、〈カスティーリャの王女の祈り〉を弾いていて、あつ、と思ったのだった。胸に落ちた、というやつである。毎日マドリッドの街を歩き、そこに住む人々と交流しながら身体全体で取り込みつつあったこの土地の「気」と、この曲がもつ空気が、音を創りだしている自分の内でひとつになった瞬間であった。気高さ、芯の強さ、そして誇り。それらがまさに「カスティーリャの王女の祈り」となって紡がれていく……。そのときから、私のなかのロドリゴは、音の連なり(横方向)や和声の積み重ね(縦方向)のみの認識ではなく、まさに3Dの、奥行きのある世界として存在するようになったのだった。スペイン音楽は身体で会得するものなのかもしれない、と思ったのはこのときである。ちなみに、ロドリゴはいにしえの宮廷舞曲などにインスピレーションの源泉を求めている、それがカスティーリャともつながるということは、あとになって知ったことである。

下山 静香

しもやま しずか / Shizuka Shimoyama



桐朋学園大学卒。文化庁派遣芸術家在外研修員としてスペインへ渡り、マドリッド、バルセロナで研鑽。スペイン各地に招かれリサイタルを行い、「スペインの心を持つピアニスト」と賞される。ラジオ、テレビ番組に多数出演、これまでに4枚のCDをリリース。現在、スペイン・中南米音楽を含む多彩なレパートリーと柔軟な感性をもつピアニストとして活発な演奏活動を展開。またクラシック界にあって、執筆・翻訳・講演・舞踊・トーク……とマルチにこなすユニークな存在として注目を浴びている。東京藝術大学、桐朋学園大学各非常勤講師。

校訂・解説を担当した楽譜(グラナドス ピアノ作品集/アルベニス ピアノ作品集)も発売中。

Official Web Site サラバンダ <http://www.h7.dion.ne.jp/~shizupf>

裸足のピアニスト・下山静香のブログ <http://ameblo.jp/shizukamusica>



マドリード、マジョール通りをソルヘ

下山静香のCD ～スペインの響き～



1st album

「アランフェス～下山静香ピアノ・リサイタル」
ART-3071(アートユニオン) 2,900円

アルベニス、グラナドス、ファリャ、モンボウ、ロドリゴといったスペインを代表する作曲家たちの名曲・佳曲を集めたデビューアルバム。

4th album

「Homenaje a Isaac Albeniz アルベニス名曲集」
MF22803 (Molto fine) 2,600円

独特の響きをかもし出す総檜づくりのホールで収録、
＜アルベニス没後100年/生誕150年＞を記念した初のオールアルベニス・アルバム。



図書館でのコンサート本番がやってきた。朗読を担当した俳優さんは、憂いを帯びて低く響く声の持ち主で、彼が詩を読み上げたあとの空間を、クリスタルな響きのロドリゴの音世界で満たしていくのは刺激的な経験だった。さて、このとき聴きにきてくれたスペイン人陶芸家いわく、

「シズカって本当は激しい女性なんだね。演奏を聴いてそう思った」

うーむ。演奏は自らを映す鏡というけれど?!・・・聴く側の「感じる自由」を尊重するためにも、本人コメントは差し控えることにしよう。

むろん、スペイン音楽に現れるエッセンスはまだまだある。かなり重要と思われるのが「グラシア」graciaだ。洒落た、こっけいな、気品、魅力・・・など様々なニュアンスの意味合いを持つが、それらをひっくるめて「粋」といえるのではないかな、と私は思っている。それはまさに“エッセンス”なのであって、効かせ方次第では本体が粋にも野暮にもなってしまうという代物。この「グラシア」はどちらかというと優美なイメージだが、同じ「粋」でもマドリード的に気取り度が強くなると「チュレリア」chuleríaとなる。形容詞形「チュロ」chuloは「生意気な」とか「カッコいい」という意味があり、現代日本語にあてはめるとさしずめ「イケてる」といったところだろうか。チュレスコという「マドリードの」「下町っ子の」を指す・・・マホとマハの世界に突入である。

マホ、マハとくれば、連想されるのはやはり、スペインを代表する画家の一人フランシスコ・デ・ゴヤだろう。

「マホ」は伊達男、「マハ」は粋な女といった意味で、ゴヤが生きた18世紀頃マドリードの下町を闊歩していたイケてる方々のこと。ゴヤは、彼らをしばしばそのキャンバスに登場させているが、このマホとマハの風俗を、上流階級の人々がこぞって真似たという一大ムーブメントがあったわけである。いわば、コスプレの感覚だ。ゴヤの筆になる“マハ風のアルバ侯爵夫人”を目にしたことのある方もいらっしゃるかと思う。

そして、このゴヤのパレットとその時代に惚れてしまった作曲家が、カタルーニャ出身のエンリケ・グラナドスである。彼のピアノ音楽の集大成にして最高傑作といえる組曲《ゴイエスカス 恋するマホたち》では、マホとマハが織りなす「愛と死」の物語が描かれる。「僕はゴヤの心とその色合いに恋焦がれている」—— そんなグラナドスの想いが詰め込まれているかのように、演奏技術的にも音楽内容的にも濃厚そのもので、否が応でもピアニスト魂が刺激されてしまう。カステーソなロドリゴ作品の全曲制覇に取り組んでいた私だが、ロマンティックの極致であるこの《ゴイエスカス》の魅力にも抗いがたかったのである。

「ロドリゴばかり練習していたのでは偏ってしまうものね?そーよそーよ、その通りだわ!」

一人二役、実に双子座的発想(言い訳)であるが、ともあれ、あれもスペイン、これもスペインなり。

こうして両天秤をひっ下げた私は、またなんだか嬉しくなって、さらなるスペイン音楽探検を続けていくのであった。(続く)

(文・写真 下山静香)

確かな技術と音楽する心を育てる

吉川二郎ギター教室 初心者歓迎!

コンサートフラメンコギター
クラシックギター

花屋敷教室(宝塚市)

天満橋教室(大阪市)

東京教室(月1回)

静岡教室(月1回)

ギターサークルJIRO(富士市)

お問合せ・入会のお申込みは

TEL.072-793-8684

詳しくはホームページで

吉川二郎 検索

nm
APRENDE
ESPAÑOL EN
SEGOVIA

Turismo de
Segovia

LA SEGUIDILLA

スペインタイルの絵付け教室
& 手作りタイル販売

スペインタイルアート工房
Tokyo/Osaka/Valencia (Spain)



大阪市西区南堀江 1-20-23-1003
Tel & Fax 06-4390-6545
Email: spaintile@japan.email.ne.jp
http://homepage1.nifty.com/spaintile/

フラメンコスタジオミゲロン

Flamenco Studio MIGUELON

現役で活躍中のプロが講師をする
フラメンコ教室



●入会金 5,250 円
●ダンス(バイレ)クラス(グループ)
60分×4回 10,500 円
●ギター・歌・パルマクラス(個人)
40分×3回 10,500 円
...詳しくはお問い合わせ下さい。

石橋スタジオ
(主にダンスクラス)
池田市井口堂 1-9-3
センチュリーショウエイ VII F

梅田スタジオ
(ギター・歌・パルマクラス)
大阪市北区太融寺町 8-10
梅田高速ビル 604

E-mail
miguelon@nifty.com

WEB
http://www.miguelon.jp/
TEL 072-760-4858
フラメンコスタジオミゲロン

Flamenco Studio MIGUELON

La seguidilla es misteriosa y trágica, como trágicas fueron las circunstancias que la motivaron. La técnica sin el grado de emotividad suficiente no es flamenca, y para interpretarla hay que tener un dramatismo muy sobresaliente.

Y si hablamos de misterio trágico, el palo que más nos puede llevar a su cúspide es la seguidilla. Ésta contiene en su interior el misterio del pueblo gitano andaluz.

El largo y hondo 'quejío' en que se estremece, concreta la atávica tristeza, la dramática emotividad y el alarido profundo del alma humana.

La seguidilla se conoció antiguamente por el nombre de *playera* o *plañidera*. Es un cante que nace de la 'toná' y en sus comienzos se interpretó sin guitarra. Si escuchamos seguidillas antiguas suenan a toná, y hay letras de estas últimas, que bien podrían cantarse por seguidillas; podríamos decir que la playera es el eslabón que unía la toná con la seguidilla actual. Posteriormente se incorpora la guitarra y es entonces cuando la playera se separa de la toná y sigue un camino distinto a ella, convirtiéndose en lo que conocemos por seguidilla.

No me costó ningún esfuerzo asimilar su ritmo y su compás; técnicamente tampoco tuve ningún problema, y aun así, no conseguía sacar ese sonido tan peculiar. Fue el transcurrir de los años y trabajar junto a compañeros con más experiencia lo que me hizo comprender y sentir la emotividad suficiente para poder expresarla como es y sacar ese sonido desgarrador. Es un palo muy delicado y aún hoy en día le tengo mucho respeto.

El baile por seguidilla lleva un compás pausado y lento en el que sobran los adornos innecesarios además de tener una sobriedad, hondura profunda, gran sentimiento y patetismo.

Fue el gran Vicente Escudero el que la hizo bailable y el que más hizo por su difusión.

En una ocasión, acompañando a la famosa bailaora 'La Toná' por seguidillas, en un momento de su baile fue tal la emoción, que tanto los cantaores como nosotros los guitarristas, nos quedamos sin reaccionar. Fue ella, con un total dominio de la situación, quien nos sacó de ese 'ensueño'. Fue una experiencia muy hermosa pero peligrosa al mismo tiempo, pues estábamos en el escenario y nos quedamos paralizados de la emoción.

Por esto y otras anécdotas, la seguidilla me enseñó a cuidar, mimar y controlar todas mis emociones en el escenario, cosa bastante difícil sobre todo para un sevillano como yo.

Miguelón



シギリージャ

シギリージャは神秘的で苦しみの曲である。
シギリージャは感情なしのテクニックだけで演奏することはできず、より強い感性を持たなければならない。フラメンコのすべての曲目の中で、アンダルシアの村の神秘性を秘め、長く、深い「うめき声」、古くから続く悲しみの感情、魂からの叫びを表現するからである。

シギリージャは昔、「プラジェラ」「プラニデラ」(貧しさという意味)という名で知られていた。「トナー」という曲から発生し、もともとは無伴奏だった。
その後、ギター伴奏がつき、「プラジェラ」は「トナー」と離れ、独自の道を作り、シギリージャと名前を変えた。

僕にとって、シギリージャのリズムや旋律、テクニックなどを吸収することは、それほど難しくなかったが、その独特の音を表現することはなかなかできなかった。経験に経験を積み、ようやく必要な表現力や感性

が身についた。しかし、とても繊細な曲なので、今も敬意を持って丁寧に演奏するよう心掛けています。

シギリージャの踊りは、ゆっくりとした少しはみ出たようなリズムを刻み、抑えた中に、心からの大きな感情と悲哀を表現する。踊り始めたのは「ビセンテ・エスクデロ」、その後、広く踊られるようになった。

ある時、シギリージャの名舞踊手「ラ・トナー」の伴奏をする機会ができた。彼女の踊りはとても感性豊かで、あまりの空気へのまれ、歌い手もギタリストも反応できなくなってしまった。彼女はすぐさま卓越したテクニックで、夢の中にいるような僕たちを現実に戻してくれた。あまりにも美しく、危険な感情が舞台上で僕たちを麻痺させたのである。

シギリージャにはそういった逸話がたくさんあり、舞台上では丁寧に大切に感情をコントロールすることが必要である。セビージャのアーティストにとってこれはとても重要で難しいことである。

ミゲロン

Miguelón ミゲロン

フラメンコスタジオMIGUELON (ミゲロン) 主宰

スペイン・セビージャ出身。

9歳の頃よりフラメンコギターを学び、14歳のときプロデビュー。

その後スペインを中心に世界各国でコンサート、イベントショー、タブラオなどに出演。

1999年に日本に移り住み、関西を拠点として日本全国で活躍中。

現在ではギタリストに加え、審査員、イベント企画、ラジオ出演など活動は多方面に亘る。

スペイン語学習コース

スペイン語学習
各種アクティビティ
宿泊先

通年、年齢不問、レベル別クラス (初級～上級、コース、個人授業 他)



COLEGIO DELIBES



“VICENTE DEL BOSQUE”
プログラム

スペイン語学習 + サッカー 宿泊先

7月～8月

colegiodelibes
¡Y TU... HABLAS ESPAÑOL!

Avda. Italia, 21

37007 Salamanca (España)

delibes@colegiodelibes.com

www.colegiodelibes.com

スペイン&中南米への留学相談・入学手続き・無料サポート
スペイン留学.jp



〒530-0001 大阪市北区梅田 2-5-8 千代田ビル西別館 2F TEL/FAX: 06-6346-5554
www.spainryugaku.jp email:info@spainryugaku.jp

TANDEM

ESCUELA INTERNACIONAL MADRID

セルバンテス協会認定校

スペイン語と情熱!

集中コース

各公認試験コース

職業訓練コース

団体旅行

宿泊先とカルチャープログラム

www.tandem-madrid.com

info@acueducto.jp

Japan triumphs in La Catedral del Flamenco

日本には3000ものフラメンコ教室があり、教室に通う生徒は10万人以上にのぼります。

今年開催50周年を迎えたフラメンコで最も権威ある大会の1つ、カンテ・デ・ラス・ミナス(ラ・ウニオン)では丹羽暁子が日本人初となる準決勝に進出しました。

この大会によって、日本で芸術としてのフラメンコ文化が浸透し、受け継がれているということが明らかになりました。



日本人として初めて準決勝に進出した丹羽暁子



写真上: ギタリスト パコ・デルシア



Yno es para menos porque Japón tiene ya 3.000 escuelas y más de 100.000 alumnos. El Festival de La Unión en su 50ª aniversario quiso resaltar la gran labor de difusión que Japón ha hecho y sigue haciendo por el arte jondo.

Además, el año pasado, Japón se estrenó en el concurso con la presencia en la semifinal de la bailaora Niwa Akiko.

Para la mayoría, flamenco es sinónimo de Andalucía. Pero esta vez nos desplazamos por la costa del Mediterráneo hacia el Norte. Desde Andalucía, pasamos a Murcia y descubrimos que allí guardan un importante tesoro: los cantes de Levante.

El Festival de Cante de las Minas es una apuesta valiente por el flamenco más hondo. La Unión, en Murcia, lucha desde hace 50 años por la conservación de los cantes mineros, y el pasado año fue recordado por su cartel. Paco de Lucía, Enrique Morente o Miguel Poveda fueron algunos de los artistas que actuaron en el escenario del Antiguo Mercado Público, lugar donde se celebra el festival desde 1978.

EL ORIGEN: UN PUEBLO MINERO

Los cantes mineros son las señas de identidad cultural de La Unión. Este pueblo minero llegó a tener alrededor de 40.000 habitantes en el siglo XIX. La mayoría de ellos eran inmigrantes andaluces que venían a trabajar a la mina. En esta época abundaba el dinero y había muchos cafés cantantes y tabernas. Allí empiezan a escucharse los primeros cantes mineros y las letras que hablan del duro trabajo de los mineros.

Pasan los años, los cantes mineros adquieren su propia identidad y cada “palo” (cada ritmo dentro del flamenco) tiene su propio nombre. Los cantes mineros son: la minera, la cartagenera, la petenera, las tarantas y los tarantos.

En 1961, Juanito Valderrama actuó en La Unión. El cantante se salió de su repertorio habitual y cantó una cartagenera. El público protestó porque quería escuchar sus canciones más comerciales. Valderrama, molesto, declaró: “Parece mentira que aquí, en esta tierra tan rica en cante bueno, suceda esto”.

Algunos amantes del flamenco que estaban entre el público le contaron lo sucedido al alcalde. Entonces, el alcalde puso en marcha el Concurso de Cante de las Minas, para evitar la pérdida de estos cantes mineros.

EL CONCURSO

El Festival Internacional de Cante de las Minas se divide en dos bloques: el concurso y las galas. Los concursantes se presentan a las pruebas durante todo el año y finalmente sólo unos pocos concursan en las semifinales, que duran cuatro días. Por primera vez, una bailaora japonesa estuvo entre los semifinalistas.

El concurso más importante es el de cante, después está el concurso de guitarra, el concurso de baile y el más nuevo es el concurso de instrumento flamenco. En la última edición, Ana Monchón, una niña de sólo 15 años, cautivó al público con una voz exquisita. Sin embargo, el primer premio del concurso, La Lámpara Minera, fue para Miguel Ortega, cantaor de 35 años.

LAS GALAS Y EL FESTIVAL

A la entrada del Antiguo Mercado Público, hay casetas donde el público puede cenar y donde se pueden comprar todo tipo de cosas relacionadas con el flamenco, sobre todo, libros y CDs. El ambiente es muy especial porque los artistas se sientan tranquilamente en los mismos lugares que su público. El lugar es entrañable. Los grandes del flamenco, gente que actúa en los escenarios más prestigiosos del mundo, bajan hasta el escenario de La Unión para ofrecer a un público entregado y entusiasta su cante, música y su baile. Ninguno de ellos tiene suficientes palabras para agradecer a este festival lo que ha hecho por el flamenco en general y por algunos de ellos en particular. El maestro Paco de Lucía ya era un artista de fama internacional cuando el festival inauguró su concurso de guitarra. Para los cantaos Miguel Poveda y Mayte Martín, y para el bailaor Israel Galván, ganar el concurso ha sido muy importante para su carrera.

En el 50 aniversario, lo mejor del mundo del flamenco estuvo en La Unión. Y no sólo músicos, bailaores y cantaos, sino también escritores, críticos, y hasta el director de cine Carlos Saura. El festival fue todo un éxito. Sus sillas, todavía de plástico, estuvieron llenas todos los días. En 2010, cincuenta años después de la creación del festival, en La Unión se demostró que el flamenco está vivo, que sigue su camino y que la libertad en sus formas hoy se recibe con los brazos abiertos.

Clara de la Flor

Revista Punto y Coma

スペイン留学経験者があなたをサポート
留学業界13年以上の経験と実績

スペインに特化した留学サポート会社

スペイン留学代行センター

☎03-3484-3388

詳しくは→ <http://www.spain-ryugaku.jp>

スペイン 留学代行

検索

スペイン語作文の方法(表現編)

小池和良 著 四六変形判 290頁 CD付 定価2,730円

課題文139・練習417題を訳しながら、文脈に応じた適切な語彙や表現を選択した上でスペイン語を書く力を養成。実践的な解説と豊富な例文によって、語彙の選択のミス避ける語感を習得。課題文139の日本語・スペイン語解答例を対訳形式でCDに収録。本書にでている語彙や表現を網羅した詳しいスペイン語・日本語索引付。



〒162-0805 東京都新宿区矢来町106
Tel. (03)3267-8531 <http://www.daisan-shobo.co.jp>

第三書房

Mundo Español y Punto y Coma te regalan un curso intensivo de español en Argentina

Suscríbete a nuestra revista *Punto y Coma* y entrarás en un **sorteo de un curso de español en Buenos Aires***, en la prestigiosa academia Mundo Español

Todo un mes de Programa Intensivo de Español:

- ▲ 80 lecciones de español
- ▲ actividades culturales
- ▲ 1 clase de tango
- ▲ material de estudios
- ▲ transfer desde el aeropuerto hasta el alojamiento (ida)

UNA EXPERIENCIA QUE NUNCA OLVIDARÁS

CHE...¿ QUÉ ESPERÁS?!

* El sorteo se realizará el 1 de junio de 2011 entre todos nuestros suscriptores. Las modalidades de suscripción deben ser por un año o por dos años. El beneficiado tendrá todo el año 2011 para poder solicitar el curso. Todos los participantes deben ser mayores de edad.

HA-
BLA
CON
ENE



; **puntoycoma**



Infórmate en www.mundo-espanol.com www.pyc-revista.com www.hablaconene.com



Punto y Coma edición impresa

- ▲ Más de 60 minutos de audio en cada número.
- ▲ Escucha el español de Argentina, España, México, Venezuela...
- ▲ Ejercicios para preparar el DELE en el interior.

SUSCRÍBETE A LA EDICIÓN IMPRESA DE PYC

- ▲ SUSCRIPCIÓN POR 1 AÑO 52 EUROS
- ▲ SUSCRIPCIÓN POR 2 AÑOS 96 EUROS
- ▲ PRECIOS ESPECIALES PARA ESCUELAS Y BIBLIOTECAS

¡Suscríbete a Punto y Coma en www.hablaconene.com!

“思い込み”スペインサッカー観戦記



写真上段
ラモン・サンチェス・ピスファンスタジアム(左)／熱心に応援する地元ファンたち(中央)／ファンで賑わう観客席(右)



写真下段
セビージャのマフラーを手にした筆者

かつて、スペイン人は皆フラメンコを踊り、闘牛に熱狂する、などと勝手に思い込んでいたのだが、今ではそんなことはない知っている。「スペインでは1月1日・午前0時ちょうどに、鐘の音に合わせて12粒のブドウを食べて、1年の幸運を祈る」という習慣がある。そのことを聞いて、12月31日セビージャの市役所前の広場には、ブドウを持った大勢の人たちがあふれていた。今か今かと市役所の時計を見ながら、そしてその後ろにある鐘を見ながらその時を待っていた。時計の針が0時を指した時、みんな一瞬息をのんだ・・・が、鐘は鳴らなかった。皆知った。あのイベントはマドリーだけで行われ、他ではそのテレビ中継を見ながらブドウを食べるということ。(せっかくだが鐘があるんやし、みんなが集まってるんやから鳴らしたれよ!)しかし、新年を迎えた喜びで町は活気づいていた。

そのお酒が抜けきらない1月2日。リーガ・エスパニョーラ「セビージャ対オサスナ」は行われた。1時間前に会場のラモン・サンチェス・ピスファン(45,500人収容)に着いた僕たちは、チケットを買うために窓口 に並んだ。思ったとおり、怪しげなおちゃんがやって来た。「チケット買わへんか!あるで!1枚50ユーロや!」。とりあえず「いらん!」と答えておく。すると「2枚で1ユーロまけるで!」と来た。窓口には「1×2」と張り出してあった。おそらく、「1枚の金額で2枚買えます」ということだろうと思い、無視する。さらに「2ユーロまけるで!」と来た。まけ方がせこい。前に並んでいた女性に、「これは本当に安いのか?」と聞くと、首を振る。おっちゃんはおそらく別の客を探しに行った。チケットは2枚で50ユーロであった。

スタジアム前のショップでマフラーを買ってスタンドに乗り込んだ。気合十分!チケットには座席番号が書いてあるが、僕たちの座席にはすでに誰かが座っていた。どこでもいいのだろう。セビージャのホームゲーム。8割程が埋まった。オサスナのファンらしき人は全く見られない。僕たちの隣にはセビージャ大好きというオーラを出すおっちゃん

った。応援歌。みんなが立ち上がり一生懸命歌っている。隣のおっちゃんも。かわいい。キックオフ。スタジアムはどんな熱気に覆われるのだろう・・・!? 熱狂的なやじが飛び交い、試合そっちのけで騒ぎまくる者もいるかと思っていたのだが、そんなことは無くみんな真面目に観戦しているのである。驚いたことに「お行儀が良い」のである。もちろんシュートを外せば頭を抱えて立ち上がり、シュートを決めれば抱き合う(この日はセビージャの1点のみ)。いい加減なプレーがあれば「出ていけー」とブーイング。良いプレーにはしっかり拍手が起こる。お行儀良く。びっくり。今シーズン調子の上がらないセビージャが1-0で勝利。この相手で1点しか取れないところが今のセビージャを象徴していると思った。隣の熱狂的なおっちゃんは終了5分前に会場を後にした。結構たくさんの方が終了の笛を待たずして席を立てていた。結果の見えた試合より、気持ちはすでにBARだろう。そして、日本のJリーグと違い、試合後の選手たちのあいさつもなく、試合のみを見せるというのはスペイン流か?

最後まで会場に残った僕たちは、座席の下に残された大量のPIPAの殻を見て思った。これは思っていたとおり「お行儀が悪い」。

文・写真提供:Tadashi & Mikiko

- **Tadashi & Mikiko** (ただし&みきこ)

- パルセロナのBARで知り合ったタクシードライバーと文通することになった。
- リ、スペイン語の勉強を始めました。
- 今では人・食・文化など多くの感動を与えてくれるスペインに夢中になっています。

シリーズ ゲルニカをめぐる3つのエピソード

その3—ピカソの『ゲルニカ』の誕生とその波紋



スペイン検定
あなたが知っている、知らない
スペインの四択・百問

川成洋, 坂東省次 編著
【税込定価】1,575円(本体1,500円)
【出版社】南雲堂フェニックス
【ISBN】9784888964111
【仕様】四六判 並製 約220頁

スペイン内戦が勃発した時点で、直ちに共和国支持を明確にしたピカソは、1936年の8月以降、南フランスに滞在していたが、ゲルニカの惨事を知ったのは、その2日後の、1937年4月28日の夕方、パリであった。

このゲルニカの惨事に強い衝撃を受け、スペイン共和国政府から依頼されていたパリ万博のスペイン館用の壁画として、黒、灰色、白を基調とした楕円3・8メートル、横7・8メートルの『ゲルニカ』を6月4日に完成させたのだ。これがスペイン館に展示された時、あまりにも強烈過ぎて、また優れて政治的意図を内包させていたこともあって、左・右の両陣営において、その評価をめぐって、ごうごうたる議論が巻き起こしたのだ。スペインの美術評論家ジャン・カスーはこう述べている(『ピカソの戦争——《ゲルニカ》の真実』ロッセル・マーティン著、木下哲夫訳、白水社)。

ゴヤがピカソになって生き返った。それと同時にピカソはピカソとして生まれ変わった。この天才は自分自身の領域と永遠に縁を切り、自分自身の存在を否定し、その外部で生き抜こうとする巨大な野心を抱いてきた。それはまるで自らが棄てた空き家、自らが失われた肉体を見たいと狂奔する幽霊のようなもの。住処は再び見つけた。肉体と魂の両方をとりもどすことができた。おのれをゴヤと呼ぶすべてのもの、おのれをスペインと呼ぶものは再び一体化した。ピカソは祖国と再びひとつに結ばれた。

『ゲルニカ』についてのピカソ自身の解説によれば、左の牛は暗さ、残忍さ、中央の馬は弱者、苦悩する民衆を表している。つまり、『ゲルニカ』は人間の悪と蛮行をピカソ独自の手法で描いた「現代の黙示録」というものであろう。

スペイン内戦後、第2次世界大戦期もピカソはフランコ軍事独裁体制のスペインにもどらず、そのままパリのグラン・ソーギュスタン街のアトリエを仕事場にしてきた。絵画好きのドイツ軍将校がしばしばピカソのアトリエを訪れた。ピカソの友人ペンローズによると、ある将校が、ピカソのテーブルの上に一枚の「ゲルニカの写真」を見つけ、「これを作ったのは、あなたですか?」と尋ねた。するとピカソは「いいえ、これを作ったのはあなたたちですよ」と事もなげに答えたという(ベルナダック、ブーシェ『ピカソ』高階絵里加訳、創元社、1996年)。

スペイン館で展示された後の『ゲルニカ』は、第2次世界大戦後、亡命中のスペイン共和国のプロパガンダとしてヨーロッパ各地で展示され、その後ニューヨーク近代美術館に「スペインに真に民主主義的な体制が実現するまで」という条件で、無期限貸与された。

ピカソは不倶戴天の敵、フランコが死ぬ2年前の1973年にフランスのムーランで亡くなった。

1977年4月、「ゲルニカ爆撃41周年」と銘打って、ゲルニカから約30キロ離れたビルバオにあるデオスト大学が事務局となって、「ゲルニカ爆撃の学術調査委員会」が接置され、調査が開始された。

この委員会は、ゲルニカ爆撃を研究しているスペイン内外の歴史家、社会学者、ジャーナリスト、法律家、政治学者などで構成され、同月23日、ゲルニカの議事堂で、デオスト大学のフェルナンド・ガルシア・コルサル教授を議長に報告とシンポジウムが行われた。その報告によると、ゲルニカ爆撃は、ドイツのコンドル飛行軍団を主力とする作戦であったという結論に達していたものの、その作戦遂行にフランコ将軍が法的に責任があるか否かという点を解明するために、政府の公文書館に保管されているフランコ側の公文書の公開を求め、委員会と政府の間で大論争を展開した。

結局、政府は公文書の公開を拒否したために、フランコの法的責任が解明できずに、この委員会の学術調査を終了せざるを得なかったのである。

そして、ピカソが死んで8年後の、1981年9月10日、ピカソ生誕100年を記念して、またピカソが主張する政治的条件を満たすことができたこともあって、『ゲルニカ』がようやく、「最後の共和国亡命者」として、厳戒下のマドリード・バラハス空港に到着したのだ。10月25日、ピカソ生誕100年祭が、彼の生まれ故郷マラガで、スペイン国王ファン・カルロス一世の臨席のもとに盛大に挙行された。この100年祭と同時に、ブラド美術館別館で『ゲルニカ』が一般公開された。かつて、ピカソが館長に就任することになっていたが、スペイン内戦、そしてフランコ軍事独裁体制のために、就任できなかったブラド美術館であった。

それにしても、このブラド美術館別館も安住の地ではなかった。18世紀の「サン・カルロス館」を大改造し、1992年9月10日に開館されたレイナ・ソフィア芸術センター国立美術館に移されたからだ。この移送に反対する声がバスク地方から湧き起った。その後、1997年10月の会館予定のビルバオのグッゲンハイム美術館からの、開館に合わせて『ゲルニカ』の貸与を申し入れる。もちろん、絵画の貸出期間中は収入をレイナ・ソフィア美術館と折半すること、『ゲルニカ』の安全のために、レイナ・ソフィア側の担当者によるこの間の管理を任せることなどを条件にするが、『ゲルニカ』の移送に傷がつくという理由で拒否される。これを受けて、グッゲンハイム美術館専務理事のファン・イグナシオ・ビダルテは記者会見に応じてこう語った(『ピカソの戦争——《ゲルニカ》の真実』)。

ゲルニカの破壊から数えて60周年を記念する催しは、バスクの人びとが20世紀美術を代表するこの作



品を初めて故郷で目にする、歴史的な、二度と訪れることのない好機となります。・・・この拒否回答は、技術的な問題の枠を超えたものです。脆くて輸送に適さないなどと言うのは、わたしたちの知性を愚弄するものにほかなりません。わたしたちは作品を額におさめたまま、温度管理も可能な、作品保存に万全を期した車両によって輸送する綿密な計画を立てました。費用の問題ではありません。費用はすべて負担する用意があります。

・・・昔から、バスクの土地では、わたしたちは『ゲルニカ』はここに置かれるべきだと信じてきました。精神的な面から、わたしたちには『ゲルニカ』の所有を主張する権利がある、わたしたちはそう感じてきました。しかしそれも昔話です。さしあたり一件落着、今『ゲルニカ』はマドリードにあります。

また、ビルバオ選出ノバスク民族党下院議員イナキ・アナサカスティはこう述べている(上掲訳書)。

マドリードの方々がもしバスク地方がスペインの一部であると新に信じているのであれば、なぜ『ゲルニ

カ』が、たとえ一時的にせよ、ここにあってはならないのでしょうか。なんといっても、ピカソがこの絵にあたえた名前は『ゲルニカ』であって、『マドリード』ではありません。それなのにきわめて尋常ならざる官僚的な手続きを踏むうちに、国民を代表する政治家ではなく、単なる専門家が、『ゲルニカ』が傷みやすいことを気づかう気持ちはよく分ります。しかし、考えてごらん下さい。現代は人類が月に行く時代なのです。『ゲルニカ』をゲルニカまで無事運べないはずがないではありませんか。

結局、ゲルニカまで30キロと離れていないビルバオのグッゲンハイム美術館には『ゲルニカ』は展示されることはないであろう。それにしても、『ゲルニカ』がどうして生まれたのか、それを考えれば、プラド美術館別館ではなく、レイナ・ソフィア美術館に展示されるのはいかがなものか、と思うのは私ひとりではあるまい。

(終わり)

法政大学教授 川成 洋



図説 スペインの歴史

【著者】川成洋[著] / 宮本雅弘 [写真]

【ISBNコード】9784309725949

【税込定価】1,890円(本体1,800円)



川成 洋 (かわなり よう / Yo Kawanari)

1942年札幌で生まれる。
北海道大学文学部卒業。
東京都立大学大学院修士過程修了。
社会学博士(一橋大学)。法政大学教授。
スペイン現代史学会会長。

主要著書『青春のスペイン戦争』(中公新書)、『スペイン戦争—ジャック白井と国際旅団』(朝日選書)、『スペイン—未完の現代史』(彩流社)、『スペイン—歴史の旅』(人間社)ほか。

現在マドリードのソフィア王妃芸術センターに展示されている『ゲルニカ』



マドリッドの夜(4)



フラメンコのすべて

有本紀明著
(ありもと・としあき)
【税込定価】2,730円(本体2,600円)
【出版社】講談社
【ISBN】9784062151719
【仕様】四六判 ソフトカバー 366頁



ガリシアの歌 上巻

ロサリア・デ・カストロ著
桑原 真夫 (翻訳)
【税込定価】2,520円(本体2,400円)
【出版社】行路社
【ISBN】9784875344193
【仕様】A5判 ハードカバー 203頁



ロサリア・デ・カストロという詩人
桑原真夫著
【出版社】沖積舎
【税込価格】3,675円(本体3,500円)
【ISBN】9784806030294
【仕様】B6判 280頁

これまでマドリッドの夜のいくつかを取り上げてきたが、一つだけ抜けているものがある。それはフラメンコである。マドリッドの夜といえはまずフラメンコが頭に浮かぶ。私はマドリッド駐在時代、日本からの来訪者を数知れずタブラオに案内した。夕食を兼ねての場合もあるし、夕食後フラメンコを堪能したいという場合もある。いずれにせよ世話役をする我々駐在員にとってフラメンコは退屈な日常的行事でしかない。みなさんをホテルに送り届けるのは決まって深夜となる。このように接待の一つとして位置づけられていたフラメンコにはあまり興味も湧かなかった。

ところが、フラメンコの真髄に触れる事件が起きる。それはマドリッドではなく、ロンドンで。私はマドリッドのあとロンドンに駐在となった。ある日空港に向かうタクシーのラジオで視聴者によるリクエスト番組が流れていた。そのうち古いフラメンコの歌がリクエストされラジオから流れ始めた。そのとき電流のような衝撃に打ちのめされ、その曲が終わるまで身動きができなかった。フラメンコ(カンテ)とはかくも奥深い、と感嘆した。その歌は多分パストーラ・インペリオカラ・アルヘンティニータの歌であったと思う。激しさが人を驚かすケースはまああるが、激しさが(それは悲哀や悲運の激しさが大半を占めるのだが)人の心臓を驚掴みにするような感動を与えることはそんなにあるものではない。フアーリャに多くの靈感を与えたパストーラ・インペリオは時代のミューズであった。その賛美者の一人であつ

た国民的画家フリオ・ロメロ・トレスは彼女のために絵筆をふるっている。ラ・アルヘンティニータは1931年ガルシア・ロルカのピアノの伴奏に合わせ『カディス通り』を歌っている。公演先のニューヨークで病没した彼女の亡骸はスペインに移送され、多くの詩人たちがその鎮魂の詩を残している。

それから私はフラメンコに興味を抱くようになった。マドリッドを訪問するたびにフラメンコのCDも集めるようになった。しかし、自分のフラメンコの知識の乏しさはどうしようもなかった。そんなとき、私のガイド役のような素晴らしい本が出版された。有本紀明氏が心血を注いで完成された名著『フラメンコのすべて』である。題名どおり、フラメンコに関する全てが満載されている。フラメンコ誕生からの長い歴史、カンテ、バイレ、トケの歴史。特に隆盛を極めたカフェ・カンタンテの時代のバイラオーラたちの解説は圧巻である。資料編もまた実に充実している。(左欄にその著書の表紙を紹介する)

マドリッドの一夜をタブラオ訪問で過ごすのもよい。Sala Galileo GalileiやCentro Cultural Paco Rabal、Teatros del CanalやTeatro Nuevo Alcaláなどの新鮮なフラメンコもお勧めである。近頃は日本人の若い女性に秀逸なフラメンコダンサーが多い。昔と違い、最近の日本女性の体形もまんざらでもない。技術はもともと一級品である。(つづく)

桑原真夫



桑原真夫

くわばらまさお / Masao Kuwabara

詩人・エッセイスト 広島県鞆の浦出身

1977年よりほぼ毎年スペインを訪問。1984年から1989年まで銀行員としてマドリッドに駐在。ヨーロッパ在住約14年。

スペイン関係主要著書：『斜めから見たスペイン』(山手書房新社)、『それぞれのスペイン』[共編著](山手書房新社)、『スペインの素顔』(河出書房新社)、『スペインとは?』(沖積舎)、『ロサリア・デ・カストロという詩人』(沖積舎)、『我が母へ』(沖積舎)、『ガリシアの歌・上巻』(行路社)、『ガリシアを知るための50章』(明石書店、共編著)、『花へ』[写真詩集](山手書房新社)他多数。

マドリードのスペイン語コース

コースは年間を通して毎週開講



in hispania
tu escuela de español :-)

1週間～長期コース。文法+会話。文化レッスン。少人数制。課外活動。経験豊かな教師たち。観光&ツアー。フラメンコ・コース。宿泊施設紹介。パーソナル・サポート。

Inhispania - (+34) 91 521 22 31 Montera 10-12, 1-1. Madrid
www.inhispania.com | info@inhispania.com





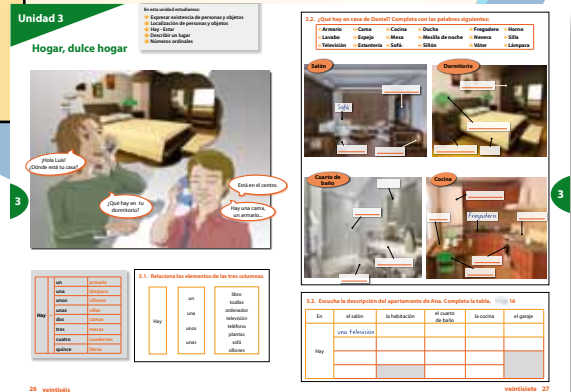
Avanzamos A1

- Curso de español dirigido a todos aquellos que desean iniciarse en el estudio de la lengua .
- 8 unidades con más de 100 páginas a todo color y **CD incluido**.
- Muy visual y comunicativo abarcando todos los niveles lingüísticos (gramaticales, léxicos, fonéticos y de escritura).
- A lo largo de todo el curso, se ha buscado la participación constante de los estudiantes para que el aprendizaje sea activo.

LIBROS
ADELANTE書店

スペイン語の本 & 雑貨
www.
adelante
shop.jp
TEL/FAX: 06-6346-5554

ADELANTE Co., Ltd.
2FL. Chiyoda Bldg. West Annex
2-5-8 Umeda Kita-ku
Osaka 530-0001 Japan
TEL/FAX: (+81) 6-6346-5554
www.adelanteshop.jp
info@adelanteshop.jp



Spanish Communications

スパニッシュコミュニケーションズはみなさんのスペイン留学をサポートします。

夏休みを利用した短期留学、また秋からの長期留学をサポートします。
学校資料のほか、『スペイン留学について』の案内をお送りしますのでご希望の方は
スパニッシュコミュニケーションズまでご連絡ください。

スペイン専門の
留学エージェント

スペイン各地の
語学学校のほか、
スペインの大学
(語学コース) を
紹介・手続き

学校への手続き、
ビザ申請書の作成、出発前
オリエンテーション等、
スペイン留学全般をサポート

留学概算費用とともに
留学プランを提案します
(無料)

Spanish Communications



(株) スパニッシュコミュニケーションズ 〒140-0015 東京都品川区西大井 2-14-2.,7F
TEL: 03-5709-9251 FAX: 03-5709-9241 e-mail : info@spacom.jp website : www.spacom.jp

日本で活動するスペイン関連クラブのご紹介

第4回 愛知県立大学 瀬戸市外国籍児童・生徒学習支援スクールボランティアグループ

私たちは、愛知県立大学のスペイン学科2～4年生の学生15名で、外国籍児童が多く在籍する瀬戸市の3校の小中学校にて、主にスペイン語、ポルトガル語を母語とする児童・生徒の学習支援、学校生活のサポートを行っています。今年度で三回目の活動となります。

支援形態は、普通学級に入り、対象児童・生徒の横で、先生の話や学習内容を簡単な日本語やスペイン語に通訳し、説明をする入り込み型のもの、外国籍児童・生徒だけが集まる日本語学級で、ひらがなや漢字などの日本語の勉強や、算数などの教科学習などをサポートする取り出し型のものの2つがあります。

外国人労働者の増加に伴い、日本の学校に在籍する外国籍児童・生徒の数も増加していますが、彼らの学ぶ権利は十分に守られていない現状があります。日本に来てまもない子どもたちはもちろん、日常会話ができるようになった子どもたちも、学習用語は理解できず、学習に大きな遅れがあります。また、言葉の問題で、友達関係に問題が起こることもあります。そのままでは彼らの進路選択の幅が狭まるだけでなく、不登校や犯罪の世界へ走る外国籍児童・生徒の増加につながることもあります。そんな子どもたちを増やさないよう、学習面、精神面で少しでも彼ら

の支えになれるよう活動しています。日本人の子どもたちとうまく関係が築けない児童・生徒については、私たちが活動に行けるとときだけでも、彼らの架け橋になれるよう努めています。

毎回活動の後には、メーリングリストで活動報告を流し、それぞれの活動に活かせる点や反省点、悩みなどを共有しあっています。また、多忙な先生たちとも情報を共有するため、活動報告書を毎回提出し、コメントをいただいています。

この活動の中で感じる一番の喜びは、子ども達の笑顔に出会えることです。最初は緊張していた子どもが、段々心を開いてくれて笑顔を見せてくれると、とても嬉しくなります。彼らにスペイン語や彼らの国の文化などを教えてもらうこともあり、共に学びあいながら活動をさせてもらっています。

まだまだ力不足ですが、毎回元気な子ども達に会えるのを楽しみにしています。これからも、子ども達にとって日本での生活が少しでも楽しくなるようお手伝いをしていきたいと思います。

(文・写真提供: 愛知県立大学 瀬戸市外国籍児童・生徒学習支援スクールボランティアグループ)



西宮市国際交流協会 スペイン語ボランティアグループのご紹介

西宮市国際交流協会(Nishinomiya city international association)はJR西宮駅(兵庫県西宮市)の直ぐ近くにあるフレンテ西宮というビルの4階にあります。

協会には、日本語、食文化、インターナショナルkids club、地球子クラブ、英語通訳・翻訳、文化交流、ホームステイ、法律相談、食文化交流ボランティアそれに私たちの「スペイン語ボランティア」という、計9つのボランティアグループがあります。

スペイン語ボランティアの主な活動は、「スペイン語おしゃべりの会」の開催(年4回)、「スペイン語新聞」の発行(年5回)、そして「西宮市国際交流デー」への参加です。

「スペイン語おしゃべりの会」では京阪神に住むスペイン語圏出身の方にお国の一般的な紹介やあるいはあるテーマについて「スペイン語でお話」をしてもらっています。1時間の話の後には参加者と残り時間約30分お茶を飲みながらスペイン語で歓談します。講師によっては

民族衣装民芸品、食べ物を持参してくれることもあり、時には歌や踊りを披露してくれる時もあります。スペイン語に余り自信のない方も楽しめるよう工夫しています。参加は西宮市民に限りません。

スペイン語新聞は関西地区に住むスペイン語圏出身の方に役立つ情報を載せています。

西宮市の国際交流デーの行事では、International Caféなる喫茶店を出し、中南米のコーヒーとお菓子などを出して国際交流に参加しています。

(文・写真: 谷 善三)



スペイン語おしゃべりの会の様子

スペインを愛した日本人—永川玲二

永川玲二先生については、本誌、創刊号(p.6~7)の拙稿「セビリア再訪——その個人的な点描」で触れました。また、彼のスペインに関する著作としては、名著『ことばの政治学』(筑摩書房、1979年。再版、岩波同時代ライブラリー、岩波書店、1995年)、『アンダルシア風土記』(岩波書店、1999年)が入手できます。



アンダルシア風土記
永川玲二著
岩波書店 1999年



ことばの政治学
永川玲二著
岩波書店 1995年

今回、永川先生のあまり知られていないスペイン以前の側面を紹介したいと思います。

1960年代末から70年代初頭のことになりますが、当時、私は東京都立大学人文学部英文科助手をしておりまして、助教授の永川先生とは「登山」とか「探検」などを通してちょこちょことお話する機会があったぐらいでした。彼はとても忙しそうで、大学には出講日だけ研究室にちらりと姿を見せるくらいで、私も週3日か2日の勤務でしたので、私が先生と会えるのは、「登山」の予定を立てるときくらいでした。それも、先生のご自宅に伺っての打ち合わせが多かったように思います。

ところが、あるときから(それがいつだったかは、定かではありませんが)、先生の自宅が使えない、大切なお客さんがきているから、と実に曖昧ない方をされたのです。とうとう先生に「いい女性ができのかな」と勝手に思って喜んでおりました。

でも、そうではなかった!

実は、先生は、ある活動をしていたのです。それは「ジャテック」(Japan Technical Committee for Assistance to U.S. Anti-War Deserters)という活動で、当時ベトナム戦争反対の市民運動を展開し一時代を画した「ベ平連」と不即不離の関係を保ちつつ展開された運動でした。具体的に説明しますと、「ジャテック」が発足したのは1968年秋。それから1年間くらいで、当時、ベトナムの戦場から離脱したアメリカ軍脱走兵を一定期間かくまい、釧路港から日本漁船に乗せ密出国させ、ソ連経由でスウェーデンへ向かわせる運動でした。この1年だけで、17名の脱走兵(途中脱落者1名を含む)を海外に逃亡させたそうです。

「ジャテック」活動の集大成ともいべき高橋武智著の『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた……ベ平連/ジャテック、最後の密出国作戦の回想』(作品社、2007年)によりますと、1968年11月、出航を目前にひかえた北海道の弟子屈で、脱走兵になりましたCIAのエージェントが忽然と姿を消し、同行していた真正正銘の脱走兵が逮捕されるという事件が起こりました。そのために、ソ連がこの脱出作戦から手を引き、今までのソ連経由ルートが使えなくなり、国外脱出の見込みのないまま、脱走兵を国内でかくまい続けることになったようです。おそらく、

その頃なのでしょうか、永川先生が、脱走兵を自宅にかくまうことになったのは。

「来栖君」というコードネームの、ジョン・フィリップ・ロウという名の脱走兵でした。「来栖君」は、永川先生宅に逗留している間に自伝的要素の濃い脱走兵小説『われらが歓呼して仰いだ旗』の執筆を始めるのです。この作品が、1970年6月の創刊号された文芸雑誌『すばる』(集英社)掲載され、以降7回にわたり連載されました。「この作品の刊行計画を立てたのも、翻訳をしたのも、英文学者でシェイクスピアの訳者としても知られる故永川玲二さんであった事実や——彼もまた来栖君をかくまった1人であり、創作にも助言を与えたにちがいない」と本書は述べており、さらに、「永川さんは来栖君にとって文学上の師匠であっただけでなく、人生の師匠であった」と付言しております。これは、まさに至言というべきでしょう。



「来栖君」と永川玲二先生(右)、1970年、©AV-Project

出典:『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた……』

(高橋武智著、作品社、2007年)

その後、「来栖君」の消息は、いかに?

「来栖君」は、都内のホストファミリーを転々とするようになります。そして「ジャテック」のメンバーが入手したスウェーデンの何通かの旅券のうち、背丈、毛髪、その他身体的特徴が一致しているのを選んで、変造を開始します。写真の張り替え、写真にデコボコをつける型押し加工、羽田入国のスタンプ作成といった変造作業。出国は伊丹空港する。なぜなら羽田入国の偽造スタンプがばれるかもしれないから。しかし、入国スタンプの見本を入手するのが大変でした。日本人の羽田入国は、「羽田帰国」というスタンプとなっており、従って来日した外国人の旅券を使って「羽田入国」のモデル・スタンプを写さなければならなかった。ともかくこうした作業は、勿論、プロのデザイナーに依頼することになり、しかも口の堅い人でなければならなかったのです。こうして「来栖君」の旅券ができ、新幹線で大阪に向い、伊丹空港から、無事、パリ・オルリー空港に降り立ったのでした。1970年12月のことでした。結局、「来栖君」は2年間、日本国内に潜伏していたことになったのです。

そのころ、というべきか、すこし時間的には前後しますが、都立大学も、大学闘争の真只中でありまして、大学当局の機動隊出動要請によって、とうとう機動隊が大学構内突入ということになりました。永川先生を始め10人足らずの先生方は学内に占拠していた学生に退去するよう説得し、自分たちが機動隊の前にビケツを張ったのです。もちろん、機動隊に即刻排除されました。それから永川先生は、大学に抗議するために辞表を提出し、横浜港から日本を離れ、セビリアで生活を始めました。

(法政大学教授 川成 洋)

ih ESPAÑA

ESP
WW

世界で最も話されている重要な言葉、スペイン語。IHス

年間を通じて幅広いコースを展開。一人一人の
興味に応じた内容で全レベルに対応しています。

厳選された滞在先をご案内しています。

また、充実のカルチャー・アクティビティー
とエクスカーションがお楽しみいただけます。

スペインの言葉と文化をじっくりと学ぶ機会。
8つの都市で皆さんをお待ちしています...

1953年に創立の世界規模の機関の信頼と
世界の皆様からの名声を誇る学校です。



IH スペインはインスティテュートセルバンテスの認定校です。

PAÑOL CON **INTERNATIONAL HOUSE ESPAÑA**
www.ihspain.com

スペインで効率的に、楽しみながら学んでみませんか。



IH サン・セバスティアン(ラ・クンサ)



IH バルセロナ



IH パルマ



IH マドリッド



IH バレンシア



IH コルドバ

IH セビーリャ(クリック)

IH カディス(クリック)

yo  ihSpain

FOR STUDENTS WHO LOVE LEARNING AND LIVING

お問合せ先(日本語でどうぞ)

japan@clic.es; spanish@bcn.ihes.com

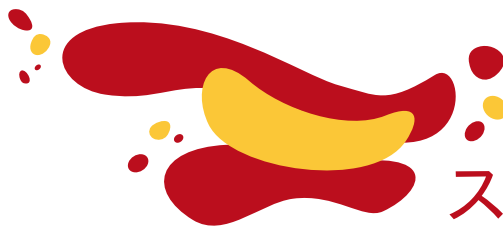


スペイン語の本 & 雑貨

www.

adelante.jp
shop

学習テキスト、文法問題集、レベル別副読本、
D.E.L.E. 試験対策本、絵本など
各種取り扱っています。送料全国一律280円
8,000円以上のお買い上げで送料無料!



スペイン語

ADELANTE

www.adelante.jp

TEL/FAX: 06-6346-5554
email: info@adelante.jp

「私のスペイン語、通じた♪」を実感

- ・ネイティブ講師だからプチ留学気分です自然なスペイン語をマスター
- ・定員6名までの少人数制グループレッスン
- ・ヨーロッパ共通参照枠CEFのレベルに即したカリキュラム
- ・振替ができるので忙しくても安心
- ・楽しい交流パーティーや文化イベントでスペイン語仲間がいっぱい
- ・目的やペースに合わせて選べるコース
(一般・旅行・商業・DELE検定対策・プライベート・
スペイン語の本を読むコースetc.)

www.adelante.jp

スペイン語教室 ADELANTE
〒530-0001 大阪市北区梅田 2-5-8 千代田ビル西別館 2F
TEL/FAX: 06-6346-5554
E-mail: info@adelante.jp・http://www.adelante.jp

無料体験レッスン随時実施中!
お気軽にお問い合わせください。



www.spainryugaku.jp

スペイン留学.jp は
スペイン留学サポートのエキスパート。

スペイン & 中南米への留学相談、手続き代行無料サービス

安心して出発できるよう、全力でサポートいたします

1週間のプチ留学から長期プログラムまで、色々な目的に合わせて豊富なラインアップ。あなたにぴったりの留学スタイル選び、入学手続きまで無料でお手伝いいたします。語学留学、シニア向けのロングステイプログラム、スペイン語+フラメンコ、スペイン料理、スペインワイン講座、など楽しいプログラムもあります。

スペイン全土、メキシコ・チリ・ペルーなど数多くの語学学校と提携
言葉に自信がなく、学校とのやり取りが不安な方も大丈夫。
入学申請書類の作成や必要な書類の送付、留学費用の海外送金などは全て代行いたします。

- ・学校への出願サポート
- ・学生ビザ申請書記入のお手伝い
- ・留学費用の海外送金
- ・ホームステイ、寮、又はシェアフラット、アパート等の申込み
- ・空港出迎えサービスなど、
各種オプションサービスの依頼代行

